## ４．「広義の中世」の突破期（8世紀後半～12世紀後半）

### ４．１　アッバース朝イスラーム帝国の瓦解

ハールーン・ラシードの死後、アッバース朝イスラーム帝国で内乱が勃発した。内乱を征圧してカリフの座を得たマアムーン（在位813～833年）は、内乱征圧に尽力したターヒルをホラーサーン地方およびイリ川以西のアミールに任じる。そして821年、ターヒルがターヒル朝を開く。首都はホラーサーン地方のニーシャープールである。

（イリ川はバルハシ湖に注ぐ川であるが、ふつう、イリ川以西はアラル海からバルハシ湖までの地域、およびアラル海に注ぐアム川とシル川に囲まれた「マーワラーアンナフル」と呼ぶ広い地域を指す。以後、イリ川以西を「トランスオクシアナ地方」と呼ぶ）

マアムーンがバグダードで「知恵の館」を建て、古代ギリシャの哲学や自然学、新プラトン主義やストア哲学を庇護したことは有名である。彼自身、ユークリッド幾何学に精通し、アラビア数字の発明にも寄与したらしい。

だが、マアムーンの死後、カリフを継承したムウタスィム（在位833～842年）は原理主義者であった。そのため各地で反乱が勃発する。彼はバグダードを凌ぐ巨大都市サーマッラーを建設して遷都した後、親征してビザンツ帝国から現在のトルコ共和国の首都アンカラを奪取するが、反乱制圧に苦慮した。ムウタスィムの代に、アッバース朝イスラーム帝国は奴隷官吏や奴隷兵士（マムルーク）に依存するようになる。

ムウタスィムの死後、彼の嫡男ワースィクがカリフを継承したが、故ムウタスィムの私兵団が彼を廃位する。その後ワースィクの弟ムタワッキル（在位847～861年）がカリフを継承する。ムタワッキルはムウタスィム以上の原理主義者で、そのため各地で反乱が再度勃発する。ムタワッキルはダマスカスに一時避難し、サーマッラーに帰還した後、長男のムンタスィルに暗殺された。

ムタワッキルが暗殺された861年、ヤアクーブという人物がサッファール朝を樹立してアフガニスタンを支配し、ターヒル朝を打倒してホラーサーン地方を支配する。その後ヤアクーブ率いるサッファール軍がメソポタミアに侵攻するが、アッバース軍が撃退する。ヤアクーブの死後、彼の弟がアミールに即位するが、900年のバルフの戦いでイスマーイール率いるサーマーン軍に敗北する。その後サッファール朝は領土をアフガニスタン南西に縮小し、サーマーン朝の支配下に入る（コラム33）。

アッバース軍がサッファール軍を撃退したのは876年であるが、当時のカリフはムウタミド（在位870～891年）である。ムウタミドが即位する前年（869年）、メソポタミア南部でザンジュ＝黒人奴隷の乱が勃発した。ザンジュの乱は883年まで続く。ザンジュの乱後、ムウタミドは首都をバグダードに戻す。他方、ザンジュの乱とサッファール軍の侵攻に乗じてアフマド・ブン・トゥールーンがエジプトでトゥールーン朝を開く。アフマド・ブン・トゥールーンはレヴァント地方も支配し、アッバース朝への献納を止める。

（ザンジュの乱に参加した黒人奴隷たちは、農業および農業土木事業に従事していた。彼らは過酷な労働を強いられ、とりわけ塩害で荒廃したメソポタミア南部の農業土木事業に従事していた黒人奴隷たちはまともな食糧さえ与えられていなかったらしい。ザンジュの乱は、黒人奴隷たちの拠点ムフターラをアッバース軍が占領した場面で終結するが、当時のメソポタミア南部の黒人奴隷人口は約100万との説もあるのに、歴史家たちはザンジュの乱に言及することなくアッバース朝の衰退を論じる場合が多い。だが筆者は、アッバース朝が衰退したもっとも大きな原因はザンジュの乱である、と考える。約14年続いたザンジュの乱の下でシーア派が勢力を拡大した）

884年、アフマド・ブン・トゥールーンが死去する。そして彼の嫡男フマーラワイフがトゥールーン朝アミールに即位する。他方、891年にムウタミドが死去し、彼の甥ムウタディド（在位892～902年）がカリフを継承する。ムウタディドはフマーラワイフの娘を娶り多額の持参金を得るが、花嫁の実家が花婿に持参金を送る習慣はアラブ世界にない。この「持参金」は、トゥールーン朝がアフマド・ブン・トゥールーンの代から滞納していた献納＝税であったかもしれない。フマーラワイフの死後、アッバース軍がトゥールーン朝を滅ぼすが、その後イフシード朝がエジプトを支配する。

ムウタディドの死後、ムクタディル（在位908～932年）が18代カリフに即位する。翌909年、現在のチュニジア共和国でシーア派イスマーイール派イスラーム教徒がファーティマ朝を開き、前章のコラム24とコラム25で述べたルスタム朝とアグラブ朝、イドリース朝を滅ぼす。そしてウバイドゥッラー（在位909～934年）がカリフ即位を宣言する。その後ムイッズ（ファーティマ朝4代カリフ。952～975年）の治世下で奴隷軍人ジャウハルがエジプトに進軍し、アレクサンドリアを陥落する。ジャウハルはイフシード朝を攻略し、現在のカイロ市を建設した。ムイッズはカイロに遷都し、その後ジャウハルは南レヴァントに進軍してエルサレムを陥落する。さらにアラビア半島の紅海沿岸を征服して聖地マッカを支配する。

他方、929年に後ウマイヤ朝アミールのアブド・アッラフマーン3世（在位929～961年）もカリフ即位を宣言する。イスラーム世界に三名のカリフが鼎立し、アッバース朝イスラーム帝国は瓦解した。

ところで、ムウタミドが死去する前年、ハムダーン・ハムドゥーンがアナトリア半島東南のアミールに就任してハムダーン朝を開き、906年に彼の弟アブドゥッラーがメソポタミア北部（ジャズィーラ地方）のアミールに就任する。アブドゥッラーの死後、彼の息子ハサンが内紛に呼応してバグダードに侵攻し、「大アミール」の称号を獲得してアッバース朝を支配した。他方、ハサンの弟アリーが944年に北レヴァントに侵攻してアレッポを占領する。だが945年、イラン高原を支配したブワイフ朝がバグダードに侵攻し、ムイッズ・ウッダウラが「大アミール」の称号を奪取する。その後ハムダーン朝が滅亡し、ファーティマ朝が北レヴァントを併合する。

ムイッズ・ウッダウラは、アッバース朝のアター制をイクター制に変更した。アター制は、ウマイヤ朝アラブ帝国の制度を継承する制度で、カリフが官吏や兵士に俸給を支払う制度である。他方、イクター制は各アミールに各地の徴税権を与え、各アミールが官吏や兵士に俸給を支払う制度である。すなわち、イクター制はビザンツ帝国のテマ制や唐の藩鎮制と同様な中世帝国の統治体制である。

（テマ制や藩鎮制も同様であるが、イクター制は支配者層が国税＝人頭税（ジズヤ）を徴税し、地方の有力者層が地方税＝地租（ハラージュ）を徴税して官吏や兵士に俸給を支払う制度である。アッバース朝イスラーム帝国に限らず、版図を容易に統治できなくなった場面で古代帝国のスキームを重畳して再起を図る傾向が中世帝国にあるのかもしれない。だが、古代帝国のスキームは復元できない。貨幣経済が、古代帝国への遡行を困難にしている。ちなみに、ブワイフ朝はシーア派十二イマーム派イスラーム教徒が開いた王朝である。十二イマーム派は現在のイラン・イスラーム共和国の国教であるが、当時の十二イマーム派は少数派である。ムイッズ・ウッダウラが大アミールの称号を奪取したのは、アッバース朝を支配して十二イマーム派を庇護するためであったように思う。ブワイフ朝はアズド・ウッダウラ（在位978～983年）が大アミールの代にメソポタミア全域とイラン高原を支配し、最盛期を迎える。だが彼の死後、ガズナ朝や後述するカラハン朝と争い衰退する。そして1062年、セルジューク朝がブワイフ朝を滅ぼす）

ブワイフ朝より少し遅れて、サーマーン朝の将軍アルプテギーンがアフガニスタンのガズニーでガズナ朝を開く。ガズナ朝はサブク・ティギーンの代に北インドのパンジャーブ地方に侵攻し、ペシャーワルを占領する。そして999年、中央アジアを支配し、カラハン朝がサーマーン朝を滅ぼした後、ホラーサーン地方を支配する。その後ガズナ朝は北インド侵攻をくり返し、ラホールを占領する（コラム34）。

ガズナ朝がホラーサーン地方を支配し、さらに北インド侵攻をくり返したのはマフムード（在位977～1030年）が「スルターン」の代である。マフムードの死後、ガズナ朝はセルジューク朝に攻め込まれ、1040年のダンダーナカーンの戦いで大敗する。ガズナ朝は版図の大部分を失い、ラホールとその周辺を支配する小王朝として残ったが、1187年に後述するゴール朝が攻め滅ぼす（コラム35）。

（マフムードはアミールを号さず、「スルターン」を号した。歴史家たちは、マフムードが最初のスルターンであると述べている。しかし、アッバース朝カリフは様々な尊称をマフムードに与えたが、スルターンの称号を与えていない。ガズナ朝を開いたアルプテギーンは、おそらくサーマーン朝に配慮してアミールを号しなかった。次のサブク・ティギーンもアミールを号していない。アルプテギーンもサブク・ティギーンもアミールを号する代わりにスルターンを号した。マフムードはそれを継承した。アッバース朝カリフが正式に「スルターン（君主）」の称号を与えた最初の人物はセルジューク朝を開いたトゥグリル・ベクである）

コラム33： サーマーン朝

後ウマイヤ朝とイドリース朝は独自の金貨や銀貨を鋳造して発行した。おそらく、アグラブ朝やターヒル朝、トゥールーン朝も独自の金貨や銀貨を鋳造して発行した。サーマーン朝も独自の金貨や銀貨を鋳造して発行したが、初代アミール＝ナスル1世の死後、2代アミールに即位したイスマーイール・サーマーニー（892～907年）はアッバース朝から徴税権＝イクターも獲得している。すなわち、サーマーン朝はアッバース朝イスラーム帝国から独立した。ちなみに、サマルカンドとブハラが巨大都市化したのはサーマーン朝期である。現在、サマルカンドもブハラもウズベキスタン共和国の古都として栄えている。

サーマーン朝は、イスマーイール・サーマーニーの代に本文で述べたサッファール朝を支配し、版図をホラーサーン地方とトランスオクシアナ地方、アフガニスタン北部等に拡大する。だが、その後衰退し、999年に滅亡する。

## コラム34： カラハン朝

安史の乱が勃発する約10年前、鉄勒部族のウイグルが東突厥を滅ぼしてモンゴル高原を支配し、唐と友好関係を結ぶ。唐はウイグルの援軍を得て安史の乱を鎮圧した。その後ウイグルはタリム盆地およびジュンガル盆地（概ね現在の新疆ウイグル自治区）を占領してシルクロードを支配する。そして790年から約30年、ウイグルと唐の連合軍が吐蕃軍と戦火を交えた。821年、唐と吐蕃が和睦し、840年、ようやくウイグルと吐蕃の和議が成立する。

その後寒波がモンゴル高原を襲う。多数の家畜を失ったウイグル部族は現在の甘粛省とタリム盆地およびジュンガル盆地に移動し、甘州ウイグル王国と西ウイグル王国＝天山ウイグル王国を建国する（やがて西夏が甘州ウイグル王国を滅ぼし、モンゴル帝国が西ウイグル王国＝天山ウイグル王国を併合する）。

他方、吐蕃では843年にラン・ダルマ王が廃仏を断行する。だが、ラン・ダルマ王は暗殺され、その後吐蕃は南北に分裂する。そして唐が現在の青海省と甘粛省を奪還する。

9世紀後半、モンゴル高原もチベット高原も疲弊した。そして10世紀前半、唐の消滅と同期するようにウイグル帝国も吐蕃帝国も消滅する。

（インドシナ半島も同様である。唐と吐蕃が平和条約を結んだ後、南詔国が現在の四川省に侵攻し、成都市を一時占領した。その後ビルマやタイ、ラオス、カンボジアにも侵攻し、ベトナムを支配して領土を拡大する。だが902年にクーデターが勃発して滅ぶ。その後短命王朝が続き、937年、段思平が現在の雲南省で大理国を開国する）

ウイグル帝国滅亡後、カラハン朝が中央アジア（概ねフェルガナ盆地）を支配する。当初、カラハン朝は仏教国であったが、大ハンに即位したサトゥクが10世紀中頃にイスラーム教に改宗する。

サトゥクの死後、彼の息子ムーサーや孫のアリーが大ハンに即位してタリム盆地のホータン王国＝于闐に侵攻した。ムーサーもアリーも敗退するが、1006年、アリーの後を継いだアフマド1世がホータン王国を滅ぼす。その後アフマド1世は西ウイグル王国＝天山ウイグル王国に侵攻したが敗退する。しかしカラハン朝はガズナ朝と争い、トランスオクシアナ地方を占領した。

その後カラハン朝はトランスオクシアナ地方を支配する「西カラハン」と中央アジアを支配する「東カラハン」に分裂する。セルジューク朝が西カラハンも東カラハンも属国化するが、セルジューク朝は1141年のカトワーンの戦いで西遼に敗退し、西遼がトランスオクシアナ地方と中央アジアを支配する。その後ホラズム・シャー朝が西カラハンを一次支配する場面もあったが、13世紀にモンゴル帝国がトランスオクシアナ地方と中央アジアを支配する。

ちなみに、カラハン朝を開いた部族が突厥系部族であったか否かはわからない。とはいえ、西カラハンと東カラハンは現在の「西トルキスタン」と「東トルキスタン」のはじまりである。

## コラム35： 世界通貨の誕生

他王朝の財貨鋳造と財貨発行を容認し、徴税権まで譲渡したアッバース朝イスラーム帝国は衰退するが、銀貨の分散鋳造と分散発行が銀貨の秤量貨幣化を促進した。そして銀貨＝銀がユーラシア大陸西部の共通財になり、奴隷貿易がはじまる（ちなみに、銀貨が秤量貨幣化したのはハールーン・ラシードがカリフに即位した頃である）。

銀貨＝銀はユーラシア大陸東部でも共通財になる。10世紀後半、ユーラシア大陸西部でも東部でも秤量貨幣化した銀貨＝銀が世界通貨になり、中世帝国で封建制が誕生する。そして中世帝国から封建制を「輸入」した亜周辺が家産国家に変貌する。中世帝国の封建制は12世紀後半に消滅するが、亜周辺＝家産国家の封建制は「広義の近代」の突破期がはじまる16世紀後半まで続く。

ちなみに、歴史家の多くが、封建制を亜周辺のオリジナルな制度であると考えている。亜周辺が中世帝国から封建制を「輸入」したと論じる歴史家は少ないが、筆者は少数派の言説を支持したい。封建制は身分制と恩貸地制が複合した制度で、中世帝国の産物である。その後、亜周辺が家産国家を形成する場面で必要なスキームになる。

封建制が誕生した経緯は後述するが、「広義の中世」の突破期前半（8世紀後～10世紀後半）は奴隷貿易が活発化して貨幣経済が肥大し、貨幣経済の下で荘園が巨大化した時代である。そして国教会が「銀行が存在しない時代の銀行」の役割を担う。だが、銀貨＝銀が世界通貨になり、貨幣経済が変貌した後、「財貨の番人」としての国教会が不要になる。

## ４．２　マケドニア朝ビザンツ帝国とコムネノス朝ビザンツ帝国

867年、副帝バシレイオス1世が帝位を簒奪し、ビザンツ帝国の皇統がアモリア朝からマケドニア朝に変遷する。その頃からアッバース朝イスラーム帝国の衰退がはじまるが、他方、ブルガリア王国が巨大化した。

913年、シメオン1世（在位893～927年）が戴冠し、ブルガリア王国が「ブルガリア帝国」になる。シメオン1世下のブルガリア帝国はビザンツ帝国との戦争を繰り返すが、彼の死後、後を継いだペタール1世（在位927～967年）がビザンツ皇帝の孫娘と結婚し、友好を維持する。約40年の平和期間に、ビザンツ帝国は国力を回復した（コラム36）。

（ビザンツ帝国西方にも変化があった。9世紀初頭、スラヴ人がボヘミア（現在のチェコ共和国）でモラヴィア王国を開国した。当初、モラヴィア王国の国教会はカトリック教会であったが、846年に即位したラスチスラフが東フランク王国の干渉を嫌い、ビザンツ帝国に宣教師の派遣を依頼する。このとき、ギリシャ正教会が派遣した宣教師が有名なキュリロスとメトディオスの兄弟である。キュリロスとメトディオスの兄弟はグラゴル文字を考案して聖書を「スラヴ語」に翻訳した。だが870年、東フランク王国＝ドイツの支援を得たラスチスラフの弟ズヴァトプルクがモラヴィア王位を簒奪する。そしてキュリロスとメトディオスの死後、彼らの弟子たちを追放する。しかし、追放された弟子たちをブルガリア王ボリス1世が受け入れる。ブルガリアに移った弟子たちはギリシャ文字に近いキリル文字を考案して聖書をスラヴ語に翻訳した。キリスト教の布教により、ブルガリアの識字率が高まるが、他方、新たな異端（パウロ派とボゴミール派）が誕生する。筆者に、それら異端とギリシャ正教会やカトリック教会がどうちがうかは説明できないが、それら異端の誕生経緯が過去の異端（アリウス派やネストリウス派）の誕生経緯に似ている。しばらくして、西ヨーロッパでもカタリ派やワルドー派といった異端が誕生した。それら異端がボゴミール派等の影響下で誕生したことはあきらかである。ちなみに、王位を簒奪したズヴァトプルクは、モラヴィア王国の版図を現在のハンガリー共和国とポーランド共和国、バルカン半島西部に広げた。だが彼の死後、東方のマジャール人がパンノニア平原に侵入し、モラヴィア王国を滅ぼす。その後東ヨーロッパのスラヴ人がハンガリーを挟んでチェコやポーランドの西スラヴ人とセルビアやクロアチア、スロベニア、ボスニア等の南スラヴ人に分離する。1171年にステファン・ネマニャが開国したセルビア王国は、南スラヴ人＝ユーゴスラヴ人が開国した最初の王国である。セルビア王国は、ステファン・ウロシュ4世ドゥシャン（在位1331～1355年）の代に版図を拡大して「帝国」になるが、ドゥシャンの死後、分裂する。そして1371年のマリツァの戦いと1389年のコソボの戦いでオスマン帝国に惨敗し、滅亡する）

963年、クレタ島を奪還した名将ニケフォロス・フォカスがビザンツ皇帝ニケフォロス2世に即位する。そして小アジアと北レヴァント、キプロス島とロードス島をイスラーム帝国から奪還した。他方、966年にスヴャトスラフ1世がハザール・カガン国を征服し、キエフ大公国を建国する。ちなみに、スヴャトスラフ1世はスラヴ人ではない。スカンジナビア半島から南下したノルマン人＝ヴァリャーグである（コラム37）。

967年、ビザンツ皇帝ニケフォロス2世はスヴャトスラフ1世と同盟を結び、ブルガリア帝国を挟撃する。ブルガリア帝国は崩壊したが、ドナウ川北岸を占領したスヴャトスラフ1世下のキエフ大公軍＝キエフ・ルーシ軍がトラキア地方まで南下し、ビザンツ帝国の版図に侵入する。

当時のビザンツ帝国は、ニケフォロス2世を殺害したヨハネス・ツィミスケス＝ヨハネス1世が皇帝に即位していた。ヨハネス1世率いるビザンツ軍は、キエフ・ルーシ軍の侵攻を阻止し、スヴャトスラフ1世をドナウ川河口付近まで追いつめる。

北方の安全を確保したヨハネス1世は、ドイツ皇帝オットー1世と和約し、西方の安全を確保して東方に進軍する。974年、ヨハネス1世率いるビザンツ軍がファーティマ朝からメソポタミア北部とアルメニアの一部を奪還し、その後北レヴァントの一部も奪還する。

もしもヨハネス1世がレヴァント地方全域を奪還していれば、その後の歴史は変わっていたかもしれない。だが、ヨハネス1世は976年に死去し、バシレイオス2世が即位する。他方、滅亡したブルガリア帝国の地方長官サムイルが新生ブルガリア帝国＝西ブルガリア帝国を開国し、テッサリアを占領する。986年から約四半世紀、バシレイオス2世下のビザンツ軍と西ブルガリア軍が戦い続けた。

ビザンツ軍は、1014年のクレディオン峠の戦いで西ブルガリア軍を撃破する。そして1018年、西ブルガリア帝国を征服する（コラム38）。

新たな版図は新たな統治制度を必要とする。バシレイオス2世は、奪還した新版図＝ブルガリアで税の物納を容認し、他方、既存版図の自由農民を保護した。新版図では、貨幣経済が発達していない。すなわち、財貨の社会的蓄積が不十分である。したがって、新版図での税の物納は妥当な政策であった。しかし、既存版図（ギリシャや小アジア）の自由農民を保護することはできなかった。

マケドニア朝期のビザンツ帝国は、大土地所有を制限して荘園主の土地買収を抑止し、自由農民を保護した。だ

が、自由農民に農税と人頭税の両方を課税していたとすれば、税制を改めない限り、彼らの土地売却を阻止できない。なぜなら、農税は農作物の収穫量に応じた額を納税すればよいが、人頭税は農作物の収穫量と無関係に一定の税を納税しなければならないからである。すなわち、定率税制と定額税制のちがいがある。バシレイオス2世は、アレレンギヨン制（自由農民が人頭税を納税できない場合、近隣の有力者＝荘園主等が代わりに納税する制度）を制定して対処したが、1025年にバシレイオス2世が死去し、アレレンギヨン制がなくなる。そして大土地所有制限がなくなり、新版図の税制も既存版図の税制と同様になる。

版図が拡大して国境が遠ざかれば、軍管区の意義が消失し、他方、多数の文官が必要になる。ビザンツ帝国のテマ制が形骸化し、官僚機構が肥大して軍が傭兵集団化した。しかもクレタ島やキプロス島、ロードス島等のエーゲ海諸島を奪還したため、ビザンツ帝国は海軍を増強する。ビザンツ海軍が巨大化して黒海とエーゲ海、イオニア海等の海上を支配した後、造船技術と商船団を有するヴェネツィア等イタリア都市国家が勃興する（当時のユーラシア大陸西部では、ビザンツ帝国が絹織物を生産し、ヴェネツィアやジェノヴァの商人たちが買い付け、西ヨーロッパやイスラーム圏で売っていた。そして秤量貨幣化した銀貨＝銀が事実上の基軸通貨になっていた）。

荘園の巨大化、および官僚機構の肥大化と陸海軍の巨大化により、ビザンツ帝国の財政は悪化した。そして金貨の質＝純金含有量が低下する。1057年に即位したイサキオス1世は、軍管区制を強化して官僚機構を縮小し、財政再建を試みるが病に倒れる。イサキオス1世は、元老院議員のコンスタンティノス・ドゥーカス＝コンスタンティノス10世に帝位を譲渡した。ビザンツ帝国の皇統がマケドニア朝からドゥーカス朝に変遷する。

（バシレイオス2世は、嫡子を残すことなく死去した。彼の弟の娘ゾラとテオドラが婿を得てマケドニア朝をつなぐが、有能な婿を得ることができなかった。イサキオス1世は、ゾラとテオドラが死去した後に即位したビザンツ皇帝で、バシレイオス2世の縁者ではない）

その頃、トランスオクシアナ地方で誕生したセルジューク朝がホラーサーン地方とイラン高原、メソポタミアを支配し、アッバース朝カリフからスルターンの称号を得たアルプ・アルスラーン率いるセルジューク軍が北レヴァントでファーティマ軍と対峙していた。

アルプ・アルスラーンは、ビザンツ帝国との戦争を回避していたように思う。だが、おそらく内政の失政を外征で解消しようとしたビザンツ皇帝ロマノス4世率いるビザンツ軍が、アルプ・アルスラーン率いるセルジューク軍を攻撃する。1071年、セルジューク軍はマラズギルトの戦いでビザンツ軍を撃退した。セルジューク軍はさらに進軍し、北レヴァントと小アジアの大半を占領する。アルプ・アルスラーンは、占領した小アジアを同族に与え、小アジアでルーム・セルジューク朝が誕生する（以後、本家セルジューク朝を「大セルジューク朝」と呼ぶ）。他方、ノルマン人が地中海に侵入し、ビザンツ帝国はイタリア半島南部のカラブリアやプッリャ、ギリシャの一部も失う（コラム39）。

ビザンツ帝国は、マケドニア朝期にバルカン半島北東部を奪還し、ドゥーカス朝期に小アジアの大半を失った。だが縮小した版図で新たな統治制度が誕生する。1081年、ドゥーカス朝から帝位を簒奪してコムネノス朝を樹立したアレクシオス・コムネノス＝アレクシオス1世は、地方徴税権を認め、プロノイア制＝恩貸地制を実施する。

他方、ヴェネツィアと同盟を結び、ギリシャの一部（アルバニアやコルフ島）をノルマン人から奪還する。そしてローマ教皇ウルバヌス2世に傭兵の提供を要請し、ルーム・セルジューク朝から小アジアを奪還しようとする。

だが、ローマ教皇ウルバヌス2世は、クレルモン教会会議で聖地エルサレムの奪還を呼びかけた。1096年、第1回十字軍遠征がはじまる。

ちなみに、プロノイア制の「プロノイア」は官位（あるいは爵位）を意味する。ビザンツ帝国は、マケドニア朝末期から官位を売却していた。したがって、官僚機構が肥大したが、他方、官位は年金受給資格でもあった。すなわち、将来の年金受給を見込んで官位を購入する人々が大勢いた。そして、ドゥーカス朝期のビザンツ帝国は年金の支払いに苦慮していた。初代コムネノス朝ビザンツ皇帝アレクシオス1世は、年金を支払う代わりに公有地を分配した。それら公有地＝恩貸地は、帝国や教会が保有する土地である。

公有地＝恩貸地の分配は、小作農民を荘園から引き離す。コムネノス朝期のビザンツ帝国で荘園が労働力を失い衰退する。同じことが、同時代の中国（北宋および南宋）や西ヨーロッパ諸国で生じている。北宋と南宋については後述するが、コムネノス朝ビザンツ帝国は南宋と似ている。荘園が衰退した後、村落共同体すなわち「農村」が誕生する。中世帝国の封建制（身分制および恩貸地制）はやがて消滅するが、中世帝国から封建制を「輸入」した亜周辺＝西ヨーロッパ諸国等で長く残る（コラム40）。

財政難を解決する苦肉の策であったが、貨幣を濫造するより公有地を売却するほうがマシである。プロノイア制を実施したアレクシオス1世（在位1081～1118年）は名君であった。次のヨハネス2世も名君であった。ビザンツ帝国は、南宋と同様な「高度中世帝国」に進展し、コムネノス朝は約100年（1081～1185年）続く。

## コラム36： バシリカ法

シメオン1世の父ボリス1世は、異なる部族（スラヴ系とトルコ系）が共存するには、国教＝最高法規を制定して部族差を官位差で解消する必要がある、と考えていたように思う。すなわち、ブルガリア王国を中世帝国化する必要があると考えていた。ボリス1世は、キリスト教に改宗し、キリスト教の国教化を模索する。カトリック教会との関係を深める場面もあったが、ローマ教皇庁がブルガリアでの司教座設置に消極的であったため、ギリシャ正教会との関係を深める。コンスタンティノープル総主教庁が、ブルガリア大司教区の設置を認めた。ボリス1世は、反発する貴族階級を抑え、ギリシャ正教を国教化する。

889年、ボリス1世は王位を長男ヴラディーミルに譲り、修道士になる。だが、ヴラディーミルがキリスト教を否定し、伝統的な信仰の復活を試みたため、彼を廃位する。その後三男シメオン（シメオン1世）がブルガリア王に即位し、ブルガリアの公用語がスラヴ語になる。

（幼少期のシメオン1世は、ギリシャ正教会が創立したコンスタンティノープルの学校で学んでいた。ボリス1世は、彼を正教会の高位聖職者にし、ブルガリア大司教区を委ねるつもりでいたらしい。本文で述べたように、キュリロスとメトディオスの弟子たちがブルガリアに移り、ギリシャ文字に近いキリル文字を考案して聖書を訳したのはボリス1世の代である。当時のシメオン1世は、後に聖人に列せられたクリメントの下で聖書の翻訳に従事していたように思う）

ギリシャ正教を国教化したブルガリア王国は、ビザンツ帝国の友好国であるかのように見えた。だが894年、ビザンツ帝国の宦官がコンスタンティノープルからブルガリア商人を追放し、当時のビザンツ皇帝レオーン6世（在位886～912年）がそれを黙認したため、シメオン1世が激怒する。ブルガリア軍とビザンツ軍の戦闘＝マケドニアの戦いが勃発した。マケドニアの戦いは、シメオン1世率いるブルガリア軍が圧勝する。

（ビザンツ帝国の宦官は、コンスタンティノープルからブルガリア商人を追放して税率の高いテッサロニキに誘導し、利益を得ようとした。シメオン1世が、そのような悪辣な振る舞いに怒るのは当然であるが、問題は何がそのような振る舞いを可能にしたかである。マケドニア朝ビザンツ帝国で、バシレイオス1世の代に編纂をはじめたバシリカ法がレオーン6世の代に完成した。バシリカ法は、ユスティニアヌス法のギリシャ語訳であるが、公用語＝ギリシャ語で書かれた最高法規でもある。公用語で書かれた最高法規が、非公用語＝ラテン語で書かれた最高法規＝ユスティニアヌス法を卑俗法化し、国教会＝ギリシャ正教会が「法の番人」の地位を喪失して統治体制が文治体制から法治体制に変遷する。そして立法府が誕生し、国法を制定して裁判を支配するようになる。そのため、官僚の法的裁量が増大し、宦官がブルガリア商人を弾圧したように思う。その後コンスタンティノス7世（在位913～920年、945～959年）が国法を執行する体制＝行政府を構築する。統治体制が法治体制に変遷したビザンツ帝国で、ヘレニズム期のギリシャ哲学が「異教」から脱した。イスラーム圏に残存する古代ギリシャの哲学や自然学等を受け入れる環境も整う。だが、シメオン1世は「文治」を愛していた）

マケドニアの戦い後、レオーン6世は北方のマジャール人を味方に引き込む。そしてマジャール人がドナウ川を越えてブルガリア王国を襲撃する。だが、シメオン1世はさらに北方のペチェネグ人を味方に引き込み、マジャール人を挟撃して危機を脱した。マジャール人はパンノニア平原に引きこもるが、ブルガリア軍とビザンツ軍の戦闘はその後も続く。ブルガリア軍がコンスタンティノープルを包囲した場面で、ビザンツ帝国はブルガリア王国への貢納を条件に和議を結んだ。そして、コンスタンティノス7世がシメオン1世の戴冠を認める。ブルガリア王国は「ブルガリア帝国」に変貌し、版図を拡大しはじめるが、本書では、ブルガリア軍のセルビア王国への侵攻等に言及しない。

シメオン1世の死後、後を継いだペタール1世はビザンツ帝国との友好を維持しながら拡大した版図をユスティニアヌス法の下で統治する。ペタール1世治世下のブルガリアで、村落共同体＝農村が誕生した。ブルガリア経由でユスティニアヌス法を導入した同時代の西ヨーロッパも同様である。西ヨーロッパでも村落共同体＝農村が誕生した。そして、文治体制下でカトリック教会が「法の番人」の地位を維持する。

ちなみに、同時代のユーラシア大陸東部でも国法派と慣習法派が対立する場面が生じている。北宋の新法派は国法派＝法治主義者、旧法派は慣習法派＝文治主義者である。法学者たちが、国法の誕生と慣習法の卑俗法化を近代の出来事であるかのように論じる場合があるが、はじまりは中世末期である。

筆者は、バシリカ法の制定とユスティニアヌス法の卑俗法化は歴史上の大事件で、法治体制のはじまりである、と考える。とはいえ、ビザンツ帝国も北宋も皇帝が自身を最高法規化＝絶対君主化したわけではないし、国教を超越する新たな最高法規（すなわち「憲法」）を制定したわけでもない。それらは近代の出来事である（余談であるが、ホッブスが著書「リバイアサン」で論じた「自然法」は、慣習法ではない。彼は「文治」を知らない）。

## コラム37： 山の民と里の民

前章で、ウマイヤ朝に反旗を翻した反乱分子がクレタ島を占領して支配したと述べた。反乱分子たちはエーゲ海沿岸を略奪し、クレタ島を奴隷貿易の中継拠点にする。奴隷貿易期のクレタ島の歴史は割愛するが、961年にニケフォロス・フォカス率いるビザンツ軍がクレタ島を奪還し、イスラーム教徒のエーゲ海沿岸略奪がなくなる。

ところで、柄谷行人氏は、著書「世界史の実験（岩波新書）」で、「山の民と里の民は可逆である」と論じている。すなわち、山地で狩猟採集を営んでいた人々が平地に移動して農耕を営む場面があれば、その逆もある、と論じている。「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期（12世紀後半～16世紀後半）に、ユーラシア大陸各地でそのような逆行が生じた。とりわけインドや東南アジアで大規模な逆行が生じたが、それについては後述する。重視すべきことは、12世紀後半以前に世界各地の島嶼で逆行が生じたことである。クレタ島で農業を営んでいたキリスト教徒たちが、イスラーム教徒たちが侵攻した後、山岳地帯に逃れた。その後120年以上、ビザンツ帝国がクレタ島を奪還するまで抵抗し続ける。

だが、大きな疑問が別にある。山岳地帯に逃れたキリスト教徒＝農民たちは、農業を止めて狩猟採集を営んだのか。筆者は、彼らは山岳地帯に逃れた後も農業を営んだ、と考える。

山本紀夫氏が、著書「高地文明（中公新書）」で、世界各地の様々な高地農業を紹介しておられる。高地では、コメや小麦のような穀物の栽培は容易でないが、豆類や芋類の栽培は容易である。当時のヨーロッパにトウモロコシやジャガイモはないが、ヒヨコ豆やレンズ豆（ヒラ豆）、ソラ豆やエンドウがある。ヒヨコ豆料理は、ギリシャ料理の定番である。山岳地帯に逃れた農民たちは、ヒヨコ豆を栽培して主食にしたように思う。

山岳地帯に逃れた農民たちは、おそらく不耕起農業でヒヨコ豆を栽培した。不耕起農業は田畑を耕さないで土壌を改善しながら作物を栽培する農業である。収穫量は少ないが、大規模な灌漑工事が不要で大型の農機具や化学肥料等も不要である。不耕起農業あるいは不耕起栽培は、日本の休耕田等を活用する場面で有効かもしれない。

余談であるが、食糧難に苦しむ北朝鮮は、不耕起栽培をはじめるべきである、と考える。だが、北朝鮮政府はトラクターの生産や化学肥料の獲得等に邁進している。進歩主義に汚染されたスターリン主義の末路、というしかない。

## コラム38： マケドニア朝ビザンツ帝国の軍事力

むろん民衆のほぼ全員が国税を納税していたことが大きいと考えるが、ニケフォロス2世とヨハネス1世、バシレイオス2世下のマケドニア朝ビザンツ軍が強かったのは、軍の主力部隊が重装騎兵隊であったためである、といわれている。ビザンツ帝国は、おそらくカロリング朝フランク王国の重装騎士団を模倣して重装騎兵隊を編成した。とはいえ規模がはるかに大きい。ビザンツ帝国は、中央アジア等から大型の馬を輸入して飼育し、時間をかけて増やしたように思う。当時の各イスラーム王朝はそれに対抗する軍事力を持っていない。ちなみに、「ギリシャの火」がどのような兵器であったかは不明であるが、ビザンツ帝国が強力な火器を持っていたことも確かである。

バシレイオス2世はビザンツ帝国の版図を最大化した。しかも生活は禁欲的で国庫も潤った。したがって「名君」であったといわれている。しかし、西ブルガリア皇帝サムイルは停戦を望んでいた。ビザンツ帝国が西ブルガリア帝国を四半世紀攻撃して支配する必要はなかった。版図の拡大を目指すのであれば、レヴァント地方に進軍すべきであった。マケドニア朝ビザンツ帝国がエルサレムを奪還していれば、十字軍遠征などという馬鹿げた事態は起きなかったのである。バシレイオス2世の「ブルガリア人殺し」は、専制君主の大間違いとして歴史に残すべきである、と思う。

## コラム39： 大セルジューク朝とルーム・セルジューク朝

大セルジューク朝は、トルコ系部族の長トゥグリル・ベグが1038年にニーシャープールの戦いでガズナ朝を破り、ホラーサーン地方を支配したときからはじまる。その後トゥグリル・ベグはトランスオクシアナ地方やアフガニスタン、イラン高原も支配し、1055年にバグダードに入城してアッバース朝カリフからスルターン＝君主の地位を得る。

トゥグリル・ベグの死後、アルプ・アルスラーンとトゥグリルの従弟クタルミシュがスルターンの座を争う。アルプ・アルスラーン（在位1064～1072年）がクタルミシュを殺害し、スルターンに即位した。その後アルプ・アルスラーン率いる大セルジューク軍がメソポタミアを支配する。そして、本文でも述べたが、1071年のマラズギルトの戦いでビザンツ皇帝ロマノス4世率いるビザンツ軍を撃破し、北レヴァントと小アジアの大半を支配する。

アルプ・アルスラーンは、スルターンの座を争ったクタルミシュの息子スライマーン・イブン・クタルミシュに要職を与えていた。アルプ・アルスラーンの死後、1077年にスライマーン・イブン・クタルミシュが小アジアでルーム・セルジューク朝を開く。おそらく、ペルシャ人宰相ニザームルムルクがルーム・セルジューク朝の開国を進言した。

アルプ・アルスラーンは軍人である。彼は執政をニザームルムルクに委ねていた。アルプ・アルスラーンの死後、彼の長男マリク・シャー（在位1072～1092年）が17歳でスルターンに即位するが、内乱が勃発する。マリク・シャーは同族の開国（ケルマーン・セルジューク朝やイラク・セルジューク朝の開国）を承認し、他方、首都をホラーサーン地方のニーシャープールからイラン高原のエスファハーンに遷都する。立案したのはニザームルムルクである。マリク・シャーにとって、ニザームルムルクは父のような存在であった。

ニザームルムルクとマリク・シャーが統治した約20年が、大セルジューク朝の最盛期である。ニザームルムルクはニーザミーヤ学院等大学＝マドラサをバグダードや主要都市に設置し、法学者や神学者を育成した。しかし1092年にニザームルムルクとマリク・シャーが死去した後、内紛が勃発する。

（ニザームルムルクが主要都市に大学＝マドラサを設置した目的は、スンナ派の法学者を育成し、シーア派の教義に対抗するためである。シーア派ニザール派の暗殺集団がニザームルムルクを暗殺した、との説がある）

1118年、アフマド・サンジャル（在位1118～1157年）が「大スルターン（諸スルターンのスルターン）」に即位し、約四半世紀続いた内紛を終結する。そして1130年、アフマド・サンジャル率いる大セルジューク軍がサマルカンドを征服し、カラハン朝を支配する。さらに1136年にガズナ朝、1138年にホラムズ・シャー朝を支配した。しかし1141年のカトワーンの戦いで耶律大石率いる西遼軍に大敗する。その後大セルジューク朝は衰退して滅亡するが、ルーム・セルジューク朝は14世紀初頭まで残る。ルーム・セルジューク朝の歴史は後述する。

## コラム40：　封建制の伝播と変貌

カトリック教会圏は、皇帝権と教皇権が分離し、皇帝と教皇の関係は概ね対等である。だが、皇帝が教皇を支配する体制下でなければ斬新な制度改革がおそらくやれない。ビザンツ帝国では、正教会の最高司祭も皇帝の臣下である。したがって、皇帝による斬新な制度改革が可能である。皇帝が教会を支配する体制下のビザンツ帝国で、封建制＝プロノイア制（身分制および恩貸地制）が誕生した。そして、「異端」だけでなく、封建制も西ヨーロッパに伝わる（ちなみに、法治体制が西ヨーロッパに伝わったのはルネサンス期である）。

筆者の認識では、西ヨーロッパの封建制は西ヨーロッパのオリジナルな制度ではない。同じことがユーラシア大陸東部、すなわちアジアについてもいえる。たとえば、日本の封建制は日本のオリジナルな制度ではない。日本は中国＝南宋から封建制を輸入した。あるいは、韓国＝高麗から間接輸入した。だが、変貌する。

19世紀の中国や韓国に封建制はなかった、しかし日本に封建制があった、日本の武士階級は西ヨーロッパの騎士階級に類する、などと論じる日本史の専門家や社会学者、評論家等がいる。彼らは、日本が中国や韓国に先行して「近代」化したのは封建制が存在したからである、と論じる場合もある。

だが、西ヨーロッパの騎士階級は貴族階級である。他方、日本の貴族階級は武家ではない。公家である。朝廷が発行する皇朝十二銭より宋銭が普及し、公家が力を喪失して武士と農民が混然一体化した鎌倉時代の日本は封建国家であるが、支配者層が多様で、一元していない。この多様性は戦国時代まで続く。武士が階級を形成するのは江戸時代であるが、江戸時代の日本は封建国家であるということは、おそらくできない。そして、江戸時代の日本が封建国家でないとすれば、封建制を日本が中国や韓国に先行して「近代」化した理由にすることもできない。

（前章で述べたが、元朝期の中国で宋銭が使えなくなる。宋銭は、荒波を踏破して渡航する船舶の「錘」になり、日本に流入した。この流入は、元寇以上に大きな事件で、朝廷が発行しない貨幣＝宋銭の下で日本の封建制が変貌したと筆者は考えるが、宋銭の影響を深く考える日本史の専門家や経済学者はいないようである）

19世紀の世界は、「新世界」と「旧世界」に二分していた。19世紀の日本と中国や韓国の差異は、「新世界」か「旧世界」かのちがいである。それについては後述するが、筆者は、いわゆる「日本特殊論」に賛同しない。本書では、近代以降の日本を論じる場面で、日本の特殊性をなるべく論じることなく日本の国体や政体を論じる。

## ４．３ ビザンツ帝国の周辺と亜周辺

前節で、公有地＝恩貸地を分配したビザンツ帝国で荘園が衰退し、村落共同体＝農村が誕生した、と述べた。同様な場面がヨーロッパ全域で生じる。10世紀後半から、ヨーロッパ諸国の国王がビザンツ帝国のプロノイア制＝封建制を模倣して森林を恩貸地化し、諸侯に下賜しはじめる。そして世襲を認める。

歴史家たちは、ヨーロッパ諸国の森林恩貸地化と世襲化、開墾の進展を「大開墾」と呼んでいる。「大開墾」が本格化したのは11世紀中頃である。多くの農民が恩貸地に移住して森林の開墾し、農業を営んだ。他方、古代ローマ期から続いていた荘園が労働力を失い衰退する。

（過去に、フランク王カール1世が恩貸地を臣下に下賜したが、彼は土地の世襲を認めていない。したがって、諸侯が土地を開墾する場面もない。ヨーロッパで土地の開墾が進展したのは10世紀後半以降である。尚、本書では、ヨーロッパの中世農村社会を論じる場面で「バン領主」や「農奴」、「タイユ税」等の用語を使わない。それら用語は多義的で地域差も大きい。また本書では、歴史家たちが「古典荘園」と呼ぶ荘園だけを「荘園」と呼ぶ）

鉄製の斧や鋸が樹木の伐採を容易にした。開墾した土地の農耕で家畜と鉄製農具が使われ、脱穀で水車が使われるようになる。そして、農作業の協労が進展する。開墾地＝農地の多くが共有地になり、三圃式農業もはじまる。その後点在していた農家が利便性の高い土地に集まり、ヨーロッパ各地で村落共同体＝農村が誕生した。

歴史家たちは、開墾から村落共同体＝農村が誕生するまでの過程を「中世農業革命」と呼んでいるが、ドイツ農民戦争が勃発した16世紀のヨーロッパでは、農民たちは「古き良き法の時代」と呼んだ。ヨーロッパの中世農業革命＝大開墾時代は13世紀初頭まで続き、数千万ヘクタールの原生林＝森林が農地になる。

農地の拡大により、穀物の生産量と家畜の頭数が増大する。また、商人が家畜や穀物を「商品」として扱うようになる。ヨーロッパ各地で商工都市が誕生し、パリやケルン、ボンのような古都も商工都市化する。すなわち、ヨーロッパ各地で都市が商工業を担うようになる。ハンザ同盟については後述するが、村落共同体＝農村と中世都市＝商工都市の誕生に同時代性がある（コラム41）。

（しかし、14世紀中頃に黒死病が蔓延したため、農村も商工都市も一時疲弊する。ちなみに、ヨーロッパでは、古代ローマ期に建設された都市だけが「古都」である。すなわち、「広義の近代」がはじまる前、あるいはコンスタンティヌス1世がコンスタンティノープルを建設する前に建設された都市だけが「古都」である。大開墾時代にそれら「古都」も商工都市化したが、ヨーロッパから見れば、日本の京都や奈良は「新都」である）

ところで、ノルマン人たちが東西フランク王国やアイルランド、イングランドを荒らしていた頃、アヴァール人に代わりスラヴ人がボヘミア（現在のチェコ）とスロバキア、カルパティア山脈以西のパンノニア地方に移住し、モラヴィア王国を建国した。だが、東方のマジャール人（ハンガリー人）がパンノニア地方に移動してモラヴィア王国を滅ぼす。そしてロロがノルマンディー公国を建国した頃、西方に侵入しはじめる。

その頃、東フランク王国はカロリング朝が断絶し、ザクセン公ハインリヒ1世が国王に即位していた。ハインリヒ1世の死後、反乱が勃発したが、彼の次男オットー1世が平定する。その後オットー1世はボヘミアを占領して支配する。そして955年のレヒフェルトの戦いでマジャール人を撃退し、962年、「皇帝」に即位した。

ビザンツ帝国は、カール1世の西ローマ皇帝即位を認めなかったが、それから160年以上の歳月が経過している。そして、キエフ・ルーシ軍の侵攻を阻止したビザンツ皇帝ヨハネス1世は、ファーティマ朝を攻略し、レヴァント地方の全域奪還を目指していた。ヨハネス1世は、オットー1世の西ローマ皇帝即位を認めなかったが、オットー1世の息子オットー2世の西ローマ皇帝即位を保証する。972年、ビザンツ帝国の皇女テオファヌがオットー2世に嫁いだ。

テオファヌは良妻賢母の鏡のような女性であったらしい。彼女はビザンツ帝国の官僚機構と統治機構、文化を知り尽くしていた。テオファヌから「ビザンツの知」を得たオットー2世は善政を尽くす。だが973年にオットー1世が死去した後、983年にオットー2世が死去する。その後オットー2世とテオファヌの間に生まれたオットー3世が即位するが、991年にテオファヌが死去し、1002年にオットー3世が死去する。そして1024年、ザクセン朝が断絶する。

ちなみに、西フランク王国は987年に王統がカロリング朝からカペー朝に変遷している。以後、東フランク王国を「ドイツ」、西フランク王国を「フランス」と呼ぶ。ザクセン朝断絶後、ザーリアー朝がドイツ皇位を継承する（コラム42）。

（オットー1世の嫡子リウドルフが、カール1世が建国した中世イタリア王国を征服したが、彼は957年に死去する。オットー1世は、レヒフェルトの戦いでマジャール人を撃退した後、北イタリア統治に忙殺されたため、パンノニア地方に侵攻できなかった。マジャール人は、パンノニア地方でハンガリー王国を建国する）

すでに述べたが、西フランク王国＝フランスでは、旧ローマ市民＝セナトール貴族が司祭になり、荘園を経営して

いた。すなわち、フランスではキリスト教会＝カトリック教会が統治機構化し、セナトール貴族が支配層を形成していた。しかし東フランク王国＝ドイツのカトリック教会は、統治機構の役割を十分担っていない。
　歴史家たちは、「帝国教会政策」と呼んでいるが、ザクセン朝期のドイツは皇帝権の下でカトリック教会の統治機構化を推進する。そしてザーリアー朝も帝国教会政策を継承した。初代ザーリアー朝ドイツ皇帝コンラート2世（在位1024～1039年）は、帝国教会政策を推進し、カロリング朝期に再興したブルグンド王国を併合する。そして各地の有力者に伯位（侯爵より下位の爵位＝伯爵）を与えた（コラム43）。

（ドイツ帝国の支配下で、広大なブルグンド王国がプロヴァンスとブルゴーニュ、サヴォイア等に分裂した。その後プロヴァンスとブルゴーニュはフランス王国の一部になるが、サヴォイアはドイツ帝国の一部であり続ける。そして1416年、「サヴォイア公国」に昇格し、1720年に開国した「サルデーニャ王国」の母体になる。ちなみに、サルデーニャ王国の首都は現在のイタリア・ピエモンテ州トリノ市である。また、現在のスイス連邦共和国はブルグンド王国の一部＝アルル王国である。ブルグンド王国は、メロヴィング朝期もカロリング朝期もフランク王国の同盟国であったが、フランク王国が分裂した場面で分裂する運命にあった、といえるかもしれない。ブルグンド王国の歴史は興味深いが、本書では言及しない）

　コンラート2世の死後、彼の嫡男ハインリヒ3世（在位1046～1056年）がドイツ皇帝に即位して帝国教会政策を推進するが、39歳で死去する。ハインリヒ3世の死後、彼の嫡男が6歳でドイツ皇帝ハインリヒ4世（在位1056～1105年）に即位した。幼帝の即位が教皇権を強化し、帝国教会政策が変貌する。たとえば、カトリック教会がコンクラーベでローマ教皇を選出するようになる。だが、成人したハインリヒ4世が皇帝権の回復を試みる。
　1080年、「カノッサの屈辱」に耐えたハインリヒ4世は、教皇グレゴリウス7世の廃位を宣言し、対立教皇クレメンス3世を擁立してローマ市に進軍した。グレゴリウス7世は籠城して抵抗し、シチリア王国に援軍を要請する（シチリア王国については後述する）。ハインリヒ4世下のドイツ軍は撤退したが、その後シチリア軍がローマ市を略奪する。グレゴリウス7世はローマ市を離れ、1085年に死去する。
　ハインリヒ4世の死後、ドイツ皇帝に即位したハインリヒ5世がヴォルムス協約を結び、ドイツ皇帝とローマ教皇の闘争＝叙任権闘争は一応の決着を得るが、1125年にハインリヒ5世が死去し、ザーリアー朝が断絶する。その後ザクセン公ロタールがドイツ皇帝に即位するが、1137年に死去する。ロタールの死後、ホーエンシュタウフェン家のコンラート3世が即位し、次節で論じる第2回十字軍遠征に赴く（コンラート3世は、戴冠しなかったが、事実上のドイツ皇帝である）。そして1152年、コンラート3世が死去し、1155年、彼の甥がドイツ皇帝フリードリヒ1世に即位した。

（コラム40で述べたが、ビザンツ帝国は国法の下で皇帝が諸侯を支配し、版図を統治する。したがって、皇帝と諸侯の関係は主従関係で、ギリシャ正教会の総主教（カトリック教会の教皇に相当する）も皇帝の臣下である。当時の中国（北宋と南宋）も同様な「中世帝国」である。だが、ヨーロッパ諸国の場合、ビザンツ帝国の影響下にあったキエフ大公国やハンガリー王国は例外であるが、立法府に相当するものがない。すなわち、当時のヨーロッパ諸国は「国法」を制定していない。したがって、国王と諸侯の関係は契約関係になる。諸侯は複数の国王と契約できるし、条件のよいほうを選ぶこともできる。そのような状況下で、ドイツ皇帝は帝国教会政策を推進した。他方、カトリック教会も諸侯に主従関係を要求するようになる。叙任権闘争は、一応の決着を得たが、より多くの国王や諸侯を従えようとするドイツ皇帝とローマ教皇の宗主権争いはその後も続く。国王や諸侯は、ドイツ帝国の「法」に従うかカトリック教会の「法」に従うかの選択を強いられた）

　ところで、アッバース朝が北アフリカとエジプト、レヴァント地方を喪失したのは10世紀中頃である。10世紀後半のアッバース朝が奴隷の大口買い手であったとは考えにくい。アッバース朝から北アフリカやエジプトを奪取したファーティマ朝も奴隷を必要としたかもしれないが、おそらく軍が奴隷兵士（マムルーク）にして使う屈強な若い男性だけである。10世紀後半あるいは11世紀初頭、奴隷の価値が低下し、中世ヨーロッパの「奴隷にするか奴隷にされるか」の時代が終わる（コラム44）。
　1028年、イングランドを征服したノルマン人の王クヌーズ1世がイングランド王とデンマーク王、ノルウェー王を兼ね、北海帝国を建国した。だがクヌーズ1世の死後、北海帝国は内紛で消滅する。その後サクソン人のエドワードがイングランド王に即位した。イングランドの王統がノルマン系のデーン朝からアングロ・サクソン系のウェセックス朝に変遷したが、その頃、西フランク王国＝フランスでもカロリング朝が断絶してカペー朝が誕生する。そしてカペー朝フランス王アンリ1世からノルマンディー公の地位を得たウィリアム1世がイングランドに上陸し、ヘイスティングズの戦いでイングランド王ハロルド2世を倒す。ウィリアム1世はノルマン朝イングランド王国を建国した。

（正確には、ノルマンディー公ウィリアム1世がイングランドをフランス王国の支配地にした、といわなければならない。すなわち、ウィリアム1世が建国したイングランド王国はフランス王国の属国である。ウィリアム1世は人生の大半をフランスで過ごし、フランス王に臣従した）

　他方、1047年にノルマンディー公国を出立しイタリア半島を転戦していたノルマン系フランス人ロベール・ギスカ

ールが、ランゴバルト族が支配していたイタリア半島南部（カラブリアやプッリャ等）とイスラーム教徒が支配していたシチリア島を征服する。そして1081年のデュッラキウムの戦いでビザンツ皇帝アレクシオス1世率いるビザンツ軍を破り、ビザンツ領アルバニア＝ダルマツィア地方とコルフ島（ケルキラ島）を占領する。

その後ギスカールはイタリア半島南部を自身の領地とし、シチリア島を弟のルッジェーロ1世に与え、ダルマツィア地方とコルフ島を長男ボエモン1世に与えた。ギスカールの死後、弟のルッジェーロ1世がイタリア半島南部とシチリア島を統治し、彼の子息ルッジェーロ2世（在位1130～1154年）がシチリア王国を建国してシチリア王に即位する。

歴史家たちは、1066年のヘイスティングズの戦いあるいは1081年のデュッラキウムの戦い後、中世ヨーロッパのヴァイキング時代が終わったと認識している。ちなみに、ダルマツィア地方とコルフ島はアドリア海の要所である。ビザンツ帝国はヴェネツィアの協力を得てダルマツィア地方とコルフ島をボエモン1世から奪還するが、このとき、ビザンツ皇帝アレクシオス1世はヴェネツィアに関税特権等を与え、他方、ルーム・セルジューク朝が支配する小アジアの奪還を目指す。アレクシオス1世は、ローマ教皇ウルバヌス2世に傭兵の提供を要請するが、ウルバヌス2世はエルサレム奪還を呼びかけ、それが第1回十字軍遠征のはじまりになったことはすでに述べた。

コラム41： 国体の誕生あるいは露呈

帝政期の古代ローマは、版図が皇帝領と元老院貴族領に分離し、統治形態も異なっていた。すなわち、ふたつの政体が版図内に同居していた。帝都をコンスタンティノープルに移した後、古代ローマは中世帝国＝中央集権化し、政体がひとつになる。おそらく、民衆＝ローマ市民が「政体」を意識するようになったのはその頃からである。同じことが、同時代のユーラシア大陸東部＝隋唐時代の中国についてもいえる。

政体＝政府が民衆の日常行動を規制し、国体＝国家が生活空間を規定する。ヨーロッパの民衆が国体を意識するようになったのはおそらく大開墾時代である。同時代の中国＝北宋・南宋でも民衆が国体を意識するようになる。「広義の中世」の出現期に政体が誕生し、「広義の近代」の出現期に国体が誕生あるいは露呈した。同時代の日本は王朝国家時代で、朝廷が東北と関東を平定した後の日本でも国体が誕生した。

コラム42： ランスの魔術師

歴史家の佐藤彰一氏は、著書「西ヨーロッパ世界の形成（中公文庫）」で、「広義の中世」に活躍した文人を三名上げている。三名の文人は、メロヴィング朝に仕えた宮廷詩人フォルトゥナトゥス、カール1世の師でもあったトゥール司教アルクイン、そして「ランスの魔術師」と呼ばれたジェルベールである。

ジェルベールは、フランスのオーヴェルニュで生まれた。農民か牧人の子であったらしい。幼少の頃に修道院に入り、成人して修道士になる。そしてスペインのカタルーニャに遊学する。当時のスペインは後ウマイヤ朝の絶頂期で、ジェルベールはイスラーム世界の代数と幾何、天文学、音響楽を学んだ。

その後オットー2世の師になり、しばらくしてフランスのランスに移り聖堂学校や修道院学校の教壇に立つ。そして数学や天文学を教えた。当時のヨーロッパの人々にとって、イスラーム世界の高度な数学や天文学、音響楽等は驚異であった。

983年、オットー2世が死去し、オットー3世が3歳で即位する。オットー3世が成人するまでの間、オットー2世の妃テオファヌがドイツ帝国の執政を担う。当然、バイエルン公ハインリヒ2世のような大貴族が皇位を簒奪しようとする。このとき、ジェルベールは、テオファヌに仕える女官に、「私の名において、テオファヌ皇太后陛下にお伝えください。フランス国王は、陛下の御子息を支持し、ハインリヒを打倒することしか考えておりません」という手紙を送っている。そして、当時のランス大司教の協力も得て、カペー朝を樹立した（初代カペー朝フランス王ユーグ・カペーの母親はオットー1世の妹である）。

当時のビザンツ帝国は、皇帝バシレイオス2世が圧倒的な軍事力で版図を拡大していた。しかも、キエフ大公国と同盟を結んでいる。ジェルベールは、マケドニア朝ビザンツ帝国に対抗するには、ザクセン朝を中心にして西ヨーロッパ全域を帝国化する必要がある、と考えていたように思う。それは故オットー2世の意思であったし、テオファヌの意思でもあった。

（テオファヌは、ビザンツ帝国の皇女であったが、カトリックに改宗している。また、彼女はバシレイオス2世の縁者ではない。ちなみに、テオファヌがヨーロッパに生活文化をもたらしたといっても過言ではない。たとえば、ナイフとフォークを使う食事作法はテオファヌがビザンツ帝国から持ち込んだ）

991年、ジェルベールはランス大司教に就任する。そして999年、シルウェステル2世としてローマ教皇に就任した。就任後、ジェルベール＝ローマ教皇シルウェステル2世は新たな考えを抱く。ドイツ帝国とビザンツ帝国の合併である。ジェルベールは、オットー3世とビザンツ皇女ゾエとの結婚を企てた。だが1002年にオットー3世が死去し、翌年、ジェルベールも死去する。

ジェルベールは、ローマ帝国を再現しようとしていたと論じる歴史家もいる。だが、彼はリアリストである。むしろ中世帝国から脱皮した新しい帝国、すなわち「世界帝国」の建設を考えていたように思う（他方、リアリストであったことが、他の聖職者たちに「悪魔と契約したランスの魔術師」といわせることになる）。

後にモンゴル人が建設したモンゴル帝国は、ジェルベールがイメージしていた世界帝国に近い。とはいえ、世界帝国の基準は版図の広さではない。ドイツ帝国とビザンツ帝国の合併は、公用語がドイツ語あるいはラテン語とギリシャ語のふたつになることを意味する。また、文治主義と法治主義が融合し、法体系がふたつになることも意味する。すなわち、世界帝国は、公用語と法体系の複数化を容認する多言語多制度空間である。かなり後の時代になるが、ヨーロッパでは、オーストリア・ハンガリー帝国がそのような「世界帝国」になる。

コラム43： レーエン制

封建制は身分制と恩貸地制が結合した統治制度である。官僚制度と統治制度を厳密に区別しない歴史家や社会学者たちが、封建制下の身分を官位と考え、恩貸地と荘園を同列に論じる場合がある。しかし身分は官位ではないし、恩貸地は荘園＝古典荘園ではない。

西ヨーロッパ諸国で最初に封建制を導入した国家はドイツ帝国である。ドイツの封建制はレーエン制と呼ばれている。本文で述べたが、初代ザーリアー朝ドイツ皇帝コンラート2世がブルグンド王国を併合し、各地の有力者に伯位を与えたことが大きい。筆者の認識では、それがレーエン制のはじまりである。

歴史家や社会学者の多くが、レーエン制をゲルマン人の伝統的な従士制が発展したものである、と論じている。だが、ドイツ帝国は、おそらくビザンツ帝国のプロノイア制を模倣した。なぜなら、レーエン制は恩貸地の世襲を認め、恩貸地内での地方徴税も認めているからである。従士制はそのような制度ではない。まさにプロノイア制がそのような制度である（すでに述べたが、カロリング朝フランク王カール1世は恩貸地の世襲を認めていない）。

ところで、恩貸地内での徴税は物納であったが、それについて、政治学者の大竹弘二氏が、國分功一郎氏との対談本「統治新論（太田出版）」で以下のように論じている。

「たしかに、近代主権国家自体が、歴史的に見れば過渡的な制度かもしれません。そもそも近代国家は、貨幣経済の発達と連動するかたちで成立しました。貨幣経済が未発達であった中世の封建社会は労働地代（賦役）や現物地代（物納）が主でしたが、これでは遠隔地から多額の税を集めることはできない。しかし貨幣経済がすすんで、納税が貨幣でおこなわれるようになると、より広い徴税できるようになり、中央集権的な国家を形成することが可能になった。けれども、貨幣経済が国家を超えつつあるのが現代です。貨幣経済を「租税国家」というかたちで飼い慣らしていたのが近代国家だったわけですが、タックス・ヘイブンなどの問題に見られるように、それができなくなりつつある」

貨幣経済が進展したのは「近代」ではない。「中世」である。大竹氏はビザンツ帝国を見ていないし、北宋期や南宋期の中国も見ていない。

おそらく、アモリア朝期から、ビザンツ帝国の徴税は金納であった。当時、西ヨーロッパ諸国の徴税が賦役や物納であったのは、諸侯の所領がほとんど恩貸地で、ドイツ皇帝やフランス王が恩貸地内での地方徴税を認めたためである。商品経済の下で、諸侯たちは物品貨幣（穀物や家畜）を財貨に換えた。

大竹氏にとって、貨幣経済と商品経済は同じで、資本主義経済もおそらく同じである。そのような認識はまちがいであるというしかないが、筆者が注視する部分は他にある。大竹氏は、国家を制度であると論じながら、貨幣を制度であると論じない。しかし、国家が制度であるとすれば、貨幣も制度である。

貨幣は、道具的側面と商品的側面を有するが、制度的側面も有する。しかも、西ヨーロッパ諸国の徴税が物納から金納に変遷するのは近代主権国家が誕生するかなり前で、12～13世紀である。

徴税請負人が、物納＝物品貨幣を金納＝財貨化して納税していた。すなわち、徴税請負人は穀物や家畜を販売する商人であった。彼らは、穀物や家畜を販売して得た利益で自身の税と農民の税を納税していた（おそらく、穀物や家畜の販売は「許認可事業」であった。ちなみに、同時代＝鎌倉時代の日本の知行制はレーエン制に近い。日本は、おそらく中国＝南宋から知行制を「輸入」した）。

日本も同様であるが、開墾が西ヨーロッパの封建制を可能にした。西ヨーロッパの場合、広大な農地が三圃式農業も可能にする。それにより西ヨーロッパの穀物生産量が急増する。1粒の麦から3粒の麦しか生産できなかった西ヨーロッパの農民が、1粒の麦から10粒以上の麦を生産するようになり、西ヨーロッパの人口が三倍に増大した（ちなみに、日本の水田には1粒の米から100粒以上の米を生産する力がある）。

穀物生産量の増大が人口増につながり、他の様々な農作物の生産も可能にした。とりわけ家畜の飼料（ライ麦や大麦）を栽培できるようになったことが大きい。だが、開墾による森林喪失の代償も大きかったように思う。

14世紀中頃の西ヨーロッパで流行った黒死病と森林喪失が無関係であったとは思えない。黒死病が蔓延した後、西ヨーロッパの支配者層は法治主義を導入して新たな統治制度の設立に向かう。そして、統治者が立法権を求めるようになる。近代主権国家はその具現である。

（12世紀の西ヨーロッパで、穀物生産量の増大と人口の増大の下で、物品貨幣が消滅する。他方、財貨が物品貨幣の利息を継承した。すなわち、財貨に金利が生じる。筆者には、利息が物品貨幣から財貨に移行する経緯をうまく説明できないが、銀行間取引の下で変動する現代の金利＝資本的使用価値とは異質な「金利」である。おそらく、三圃式農業の下で土地＝農地の再生産性が常態化し、財貨が物品貨幣の利息を継承して金利が生じた。徴税請負人が穀物や家畜を販売する商人であったことが、間接的にそれを証明している）

## コラム44： 東ヨーロッパの二分化

ヴァイキング時代の主要な黒海貿易は奴隷貿易で、クリミア半島湾岸は奴隷の集積地であった。ノルマン人たちは、アイルランドやイングランド、フランク王国だけでなく、現在のロシアやウクライナ、ベラルーシに侵入し、在住のスラヴ人やハザール人を捕縛してヴェネツィア商人やジェノヴァ商人に売り渡していた。

キエフ大公国を建国したスヴャトスラフ1世もノルマン人＝ヴァリャーグである。彼の母オリガはキリスト教＝ギリシャ正教に改宗したが、スヴャトスラフ1世は改宗していない。スヴャトスラフ1世の三男ウラジーミル1世も、即位後、ノルマン人の伝統的な北欧信仰＝オーディン信仰の下でキエフ大公国を統治した。

だが988年、ウラジーミル1世はギリシャ正教に改宗し、バシレイオス2世の妹アンナと結婚する。それによりバシレイオス2世はウラジーミル1世から援軍を得て内乱を鎮圧したが、ウラジーミル1世が得たものも大きかった。ウラジーミル1世の改宗は、すでにギリシャ正教に改宗していたスラヴ人たちとの共存を可能にし、他方、アンナと結婚がビザンツ帝国との関係を改善する。

ウラジーミル1世の改宗と結婚は、ヴァイキング時代の終わりと奴隷貿易の衰退も意味する。ちなみに、ヨーロッパでキリスト教の国教化がもっとも遅れた王国はスウェーデンである。1008年、スウェーデン王オーロフがキリスト教＝カトリックに改宗した。他方、ヴィスワ川以東のバルト海沿岸が異教の地として長く残る。

ウラジーミル1世の死後、キエフ大公国はヤロスラフ1世（在位1019～1054年）の代に版図をカルパティア山脈以東からドン川以西に広げ、また現在のモスクワ以北およびサンクトペテルブルク以北にまで広げる。他方、キエフ大公国の西方およびバルト海沿岸にリトアニア大公国とポーランド公国が誕生する。

オットー1世がオーデル川以東に関心を寄せ、ザクセン伯ヴィヒマン等の侵略にさらされたポーランド公国の族長メシュコ1世は、ボヘミア公国（現在のチェコ共和国）の公女ドゥブラフカを娶り、ギリシャ正教からカトリックに改宗してポーランド王に即位した。そして次のボレスワフ1世（在位992～1025年）がドイツ皇帝オットー3世と同盟を結び、ポーランド王国を強国にする。また、アールバード朝ハンガリー王イシュトヴァーン1世（在位997～1038年）もオットー3世と同盟を結び、ハンガリー王国を強国にする。

しかし重要なことは、オットー3世がポーランド王とハンガリー王の戴冠を認め、大司教座の設置も認めたことである。すなわち、ポーランドとハンガリーの国教会がカトリック教会になったことである。国教のちがいが東ヨーロッパをポーランドやハンガリー等とロシアやブルガリア、セルビア等に二分した。

## ４．４　十字軍遠征と商品経済の誕生

第１回十字軍がルーム・セルジューク朝を威圧し、ビザンツ皇帝アレクシオス１世率いるビザンツ軍が小アジア西部のニカイアを奪還した。しかし十字軍の目的地は聖都エルサレムである。奪還したニカイアの守備をビザンツ軍が固め、十字軍はエルサレムを目指す。

約１３０年前にビザンツ皇帝ニケフォロス２世がイスラーム帝国から小アジアを奪還したとき、小アジア南西部のキリキア地方にアルメニア人長官を配置した。その後大セルジューク朝の支配から逃れたアルメニア人（アルメニア・キリスト教徒）たちが南コーカサス地方から移住し、キリキア・アルメニア王国を建国する。十字軍はそのキリキア・アルメニア王国に一時滞在した。そして、ボードゥアン１世がキリキア地方東部にエデッサ伯国を建国し、イスラーム勢力と対峙する。その後十字軍本隊は南下して北レヴァント北部の古都アンティオキアを攻略し、ビザンツ皇帝アレクシオス１世と和解したボエモン１世がアンティオキア公国を建国する。

（前節で述べたように、ボエモン１世は父のギスカールからダルマツィア地方やコルフ島を相続したが、ビザンツ帝国とヴェネツィアに奪還され、自身の領地を失っていた。だが、彼はビザンツ皇帝アレクシオス１世と和解し、十字軍に従軍する。アレクシオス１世は、ボエモン１世のアンティオキア公国建国を承認していた）

十字軍本隊はさらに進軍し、エルサレムを奪取する。そしてボードゥアン１世の兄ロレーヌ公ゴドフロワ・ド・ブイヨンがエルサレム王に即位し、エルサレム王国を建国する。

エルサレム王国を建国した十字軍＝エルサレム軍は、その後南レヴァント北部のアッコと中部のティルスを奪取する。だが、大きな難題が残り、新たな難題が生じた。大きな難題は、小アジアのアナトリア地方にルーム・セルジューク朝が残り、ファーティマ朝が南レヴァント沿岸都市を支配し続けたことである。新たな難題は、北レヴァントとジャズィーラ地方（現在のイラク北部）にイスラーム新王朝＝ザンギー朝が誕生したことである（コラム４５）。

大きな難題と新たな難題を抱えながら、１１００年にエルサレム王ブイヨンが死去する。エデッサ伯国を建国したボードゥアン１世が急遽エルサレムに赴き、エルサレム王に即位する。他方、ファーティマ朝がエルサレム奪還を試み、ローマ教皇パスカリス２世がエルサレム防衛軍の遠征を呼びかけた。歴史家たちが、「１１０１年の十字軍」と呼ぶこの「防衛軍」は、小アジア横断中にルーム・セルジューク軍に各個撃破され壊滅する。かろうじてトゥールーズ伯レーモンが北レヴァント北部を攻略し、彼の長男ベルトランがトリポリ伯国を建国した。

１１４４年、ザンギー軍がエデッサ伯国を滅ぼす。ローマ教皇エウゲニウス３世が新たな十字軍遠征＝第２回十字軍遠征を呼びかける。第２回十字軍の中心は、カペー朝フランス王ルイ７世率いるフランス軍とホーエンシュタウフェン朝ドイツ皇帝コンラート３世率いるドイツ軍であったが、シチリア王国と交戦状態に陥っていたビザンツ帝国は彼らを支援できない。ビザンツ帝国の支援のない第２回十字軍は、小アジア中央を横断した場面でルーム・セルジューク軍に各個撃破された（コラム４６）。

それでも、ルイ７世とコンラート３世は十字軍を立て直し、エルサレム目指して進軍する。途中、ボエモン１世が建国したアンティオキア公国に立ち寄る。その頃のアンティオキア公国はアキテーヌ公ギョーム９世の次男レーモン・ド・ポワティエが統治していた（ボエモン１世は１１１１年に死去し、彼の嫡男ボエモン２世も１１３０年に死去している）。

レーモン・ド・ポワティエはルイ７世の妃アリエノールの叔父である。そしてアリエノールもルイ７世に同行していた。レーモン・ド・ポワティエは、ルイ７世とフランス軍がアンティオキア公国にとどまり、エデッサ伯国の奪還に協力してほしいと嘆願する。だが、ルイ７世とフランス軍はアンティオキア公国を離れ、エルサレムに向かう。その後レーモン・ド・ポワティエはザンギー朝イスラーム軍と戦い戦死する。

アンティオキア公国を出立した第２回十字軍は、ダマスカスを包囲したが、ダマスカスは陥落しない。そして１１５２年、ヌールッディーン（ザンギー朝２代スルターン。在位１１４６～１１７４年）率いるザンギー朝イスラーム軍に大敗する。ルイ７世とコンラート３世は帰国し、その後コンラート３世が死去する。そして彼の甥がドイツ皇帝フリードリヒ１世に即位する。他方、ルイ７世とアリエノールが離婚し、アリエノールはイングランド王ヘンリー２世と再婚する。

（アリエノールは、叔父を見殺しにしたルイ７世を許せなかったのかもしれない。作家の佐藤賢一氏が、著書「英仏百年戦争（集英社新書）」でアリエノールの離婚と再婚を女性にありがちな情緒的出来事であるかのように論じている。だが、アリエノールは厳格な女性である。筆者は、佐藤氏の認識は間違っている、と思う）。

ロレーヌ公ゴドフロワ・ド・ブイヨンがエルサレム王国を建国してから約四半世紀の間に、ファーティマ朝は南レヴァント沿岸都市をすべて失い、地中海の制海権を喪失する。他方、エデッサ伯国を滅ぼして第２回十字軍を撃退したヌールッディーン下のザンギー朝が、ダマスカスと北レヴァントを支配し、エルサレム王国と対峙する。

１１６８年、エルサレム王アモーリーがエジプトに進軍した。ファーティマ朝はザンギー朝に援軍を要請する。シルクーフ率いるザンギー朝イスラーム軍がカイロに到着し、エルサレム軍は撤退した。ファーティマ朝はシルクーフに宰相

の地位を与えたが、その後彼が死去たため、彼の甥サラーフッディーンが後を継ぐ。
　1169年、エジプトでサラーフッディーンがアイユーブ朝を樹立し、1171年にファーティマ朝が断絶する。ファーティマ朝断絶後、サラーフッディーンはバグダードに赴きスルターンの地位を得る。その後ザンギー朝を併合し、エジプトと北レヴァントの大半、およびジャズィーラ地方を支配する。
　1187年、サラーフッディーンはジハード＝聖戦を宣言して各地のイスラーム諸侯を集め、ヒッティーンの戦いでエルサレム軍を破る。そしてトルトサとティロス、トリポリ、アンティオキアの四都市を除くレヴァント地方の沿岸都市、およびエルサレムを奪還する。
　ヒッティーンの戦いの敗北を知ったローマ教皇グレゴリウス8世が第3回十字軍遠征を呼びかけた。そして1189年、第3回十字軍遠征がはじまる。第3回十字軍の中心はドイツ皇帝フリードリヒ1世下のドイツ軍とフランス王フィリップ2世下のフランス軍、イングランド王リチャード1世下のイングランド軍であった。陸路から進軍したドイツ軍は、ルーム・セルジューク朝の首都イコニウムを占領する。だが、フリードリヒ1世がサレフ河で沐浴中に溺死したため、ドイツ軍は離散する。
　他方、海路から進軍したフィリップ2世下のフランス軍とリチャード1世下のイングランド軍は、1191年に南レヴァントの沿岸都市アッコを陥落する。しかしアッコ陥落後、フィリップ2世とフランス軍が帰国する。残ったリチャード1世下のイングランド軍と離散したドイツ軍の一部がアルスーフやヤッファ等の南レヴァント沿岸都市を陥落した。しかし、エルサレムを奪還できなかった。1192年、リチャード1世はサラーフッディーンと休戦協定を結び帰国する。イングランド軍とドイツ軍の一部も帰国した。そして1193年、英雄サラーフッディーンがダマスカスで死去する。

　ところで、当時のビザンツ帝国は、中世帝国のスキーム、すなわち皇帝が財貨を鋳造して最初に使用するスキームを維持できなくなっていた。ビザンツ皇帝が発行する金貨の質＝純金含有量が低下し、版図内では秤量貨幣化した銀貨が流通していた。たとえ金銀複本位制が機能していたとしても、質が低下したビザンツ金貨と銀貨の交換は容易でない。それでもビザンツ帝国が命脈を保つことができたのは、絹織物を生産していたからである。また、プロノイア制＝封建制の下で農民が家畜を養い、多種多様な農作物を生産していたからである（荘園制の下では、農民は自分の意志で家畜を養うことができないし、自分の意志で商品性の高い農作物を栽培することもできない）。
　おそらく、アモリア朝期のビザンツ帝国で物品貨幣が消滅した。マケドニア朝期のビザンツ帝国は、コンスタンティノープルだけでなく、テーベやテッサロニキ等のギリシャ都市でも絹織物の生産をはじめる。そしてコムネノス朝期に、エルサレム王国やレヴァント地方で誕生した十字軍都市国家の戦争需要と食料需要を満たすため、ヴェネツィア商人やジェノヴァ商人がビザンツ産の家畜や農産物を扱うようになる。すなわち、経済が「財」より「商品」に依存するようになる。そして商品（絹織物、家畜や農産物等）と銀貨＝銀の交換がビザンツ帝国を支えた（コラム47）。

（12世紀に、ヴェネツィアが馬を運ぶガレー船を発明した。この「発明」の意義は大きい。ビザンツ帝国の農民が馬を飼育し、馬の飼料＝ライ麦等も栽培するようになる。筆者の認識では、ライ麦等がゼロ次商品になり、馬が一次商品になる。そして経済空間に位相構造＝商品経済が生じる。ヴェネツィア商人やジェノヴァ商人がビザンツ産の馬やライ麦、小麦等を輸送したおかげで、13世紀末まで、レヴァント地方の十字軍都市国家が存続した。余談であるが、江上波夫氏が提唱した騎馬民族征服王朝説は滑稽というしかない。丸木舟で馬を輸送することなどできない。したがって、たとえ外来王朝であったとしても、大和朝廷は征服王朝ではない。外来王朝が平和裏に土着して支配者層を形成した歴史上の事例はたくさんある。筆者は、滅亡した伽耶国の王族が日本に亡命し、大和地方の豪族と婚姻関係を結び、大和朝廷の基礎をつくったと考える。そして、日本書紀から察するに、その後二度目の亡命があった）

　コムネノス朝期（1081～1185年）のビザンツ帝国で、経済空間に位相構造＝商品経済が生じた。同時代のユーラシア大陸東部＝南宋も同様である。すなわち、12世紀後半から「広義の近代」がはじまった。だが、資本主義経済がはじまった、ということはできない。はじまったのは商品経済であり、市場経済でさえまだはじまっていない。
　物品貨幣（家畜や穀物）が併存する時代の財貨は「制度」である。物品貨幣に利息が生じても財貨に利息は生じない。近代の起点と資本主義経済の起点を同一視する歴史家や社会学者、経済学者たちは、財貨と物品貨幣が併存する時代が長く続いたとの認識、そして物品貨幣が消滅した場面で財貨に金利が生じたとの認識を持っていないように思う。
　たとえば、経済学者の水野和夫氏は、ローマ教皇庁が金利を容認した13世紀初頭から資本主義経済がはじまったと論じている。だが、それ以前に物品貨幣が消滅したビザンツ帝国で金利が合法化している。11世紀のコンスタンティノープルの金利は6～8%前後であった。6世紀に制定したユスティニアヌス法も金利を容認していたが、ビザンツ帝国は国法＝バシリカ法の下で金利を合法化した（すなわち、未返済や利払いに対する罰則等を制定した）。
　ビザンツ帝国の経済規模が金利の合法化を可能にした、ともいえる。11世紀のビザンツ帝国の人口は約2000万で、当時のドイツとイタリア、フランスを合わせた人口より大きい。物品貨幣が消滅して家畜や穀物が商品化し、人口増を促進したように思う。

（筆者は、9～10世紀のビザンツ帝国で物品貨幣が消滅したと考えるが、西ヨーロッパで物品貨幣が消滅したのは11～12世紀である。西ヨーロッパで金利が生じるのはそれ以後で、ローマ教皇庁の金利容認は現状を追認したにす

ぎない。金利のはじまりは物品貨幣の消滅と商品経済のはじまりを意味するが、資本主義経済のはじまりではない。マルクスは、「資本論」第3巻で、金利をテコにして貨幣の道具的側面＝資本的使用価値を論じているが、ビザンツ帝国の金利合法化は財貨の制度的側面を補正する措置であった。すなわち、質的低下が続く金貨を銀貨と交換する都合上必要な措置であり、貨幣の自己言及性等の下で変動する現代の金利ではない。筆者の認識では、西ヨーロッパ諸国はビザンツ帝国の「制度」を模倣した。他方、金利を容認したローマ教皇庁は新金貨＝フローリン金貨を鋳造して発行する。余談であるが、前述した水野氏は、同時代のイタリアで葡萄畑が拡大したことも資本主義経済誕生の根拠にしている。だが、彼は小氷河期の影響を見落としている。12世紀中頃から小氷河期がはじまり、パリ盆地とイングランドの葡萄畑が消滅した。イタリアの葡萄畑の拡大は葡萄の供給不足に応じたものであり、資本主義経済誕生の根拠にするような「事件」ではない。筆者の認識では、復活したビザンツ帝国＝パレオロゴス朝ビザンツ帝国で工業が進展するが、それも資本主義経済のはじまりではない。人間労働の商品化がはじまるのは18世紀後半で、商品化した人間労働の分業と協業がはじまるのは19世紀後半である。マルクスの考えに従えば、商品化した人間労働＝労働力の分業が絶対的剰余価値を産出し、協業が相対的剰余価値を産出する）

コラム45： カトワーンの戦い

第1回十字軍遠征の頃、大セルジューク朝はスルターンの座をめぐる内紛で混乱していた。1118年にスルターンの座を得たアフマド・サンジャルが内乱を終息させ、大セルジューク朝に反旗を翻すガズナ朝を征服する。さらにメソポタミア地方のイラク・セルジューク朝を支配し、その後サマルカンドに進軍して東方のカラハン朝を征服する。そしてホラムズ・シャー朝を支配する。

アフマド・サンジャルの活躍で、大セルジューク朝は一時再興した。だが、1141年のカトワーンの戦いで耶律大石率いる西遼軍に惨敗する。

カトワーンの戦いは、「プレスター・ジョン伝説」の起源になったが、西遼と西遼を支援した天山ウイグル王国＝西ウイグル王国の国教は仏教である。国内に景教＝ネストリウス派キリスト教信徒が多数いたとしても、西遼と西ウイグル王国に十字軍を支援する理由はない。カトワーンの戦いは、河北（黄河以北）を奪還して遼＝契丹を再興しようとしていた耶律大石には余計な戦いであった。

1143年、カトワーンの戦いで大勝した耶律大石は、東征軍を編成して河北の奪還を目指すが、行軍中に死去する。他方、アフマド・サンジャルは大セルジューク朝の再興を目指すが、1157年に病死する。

（カトワーンの戦いは、10万規模の正規軍同士の戦いであった（中世ヨーロッパ最大の戦いといわれているタンネンベルクの戦いでさえ、兵員の規模はカトワーンの戦いの3分の1程度である）。双方が正面から激突し、西遼軍が圧勝している。西遼軍の勝因は武具の差である。だが、騎兵が乗る馬や駱駝の質、頭数等ではない。鉄製武具の質と量の差である。当時のユーラシア大陸東部と西部の決定的なちがいは鉄の生産量である。北宋期の中国では、庶民も暖房で石炭を消費していた。そして、河北の地では、製鉄で石炭火力が使われていた。他方、ヨーロッパやイスラーム圏の製鉄で使用する火力は木炭火力である。したがって、当時の鉄の生産量は中国が圧倒していたと考えられ、しかも鋼（スチール）に近い良質な鉄も生産していたように思う。耶律大石は、10万の兵員を集めただけでなく、良質な鉄製武具を各兵士に与えていた。余談であるが、カトワーンの戦いで大セルジューク朝軍が惨敗しなければ、アフマド・サンジャルは10万の兵員を南レヴァントに送り、エルサレム王国を滅ぼしていたかもしれない。しかし、歴史家や社会学者たちは、カトワーンの戦いをあまり重視しない。他方、彼らは製紙法が伝わったタラス河畔の戦いを重視する。タラス河畔の戦いは、中国＝唐とアッバース朝イスラーム帝国の間に生じた戦いであるが、その頃の中国＝唐の石炭消費量は微量である。したがって、ユーラシア大陸西部と東部の鉄の生産量に大きな差は生じていない。中国で鉄の生産量が著しく増大したのは、石炭消費量が増大した北宋期である。アーノルド・パーシーの著書「技術の千年史(新評論社)」によれば、998年の中国の鉄の生産量は年間3万2500トンであった。しかし1064年に年間9万400トンに増大し、1078年に年間12万5000トンに増大している）

遼から移住した耶律大石は、河北から多量の鉄と鉄製武具を得ることができた。あるいは、西遼と西ウイグル王国でも多量の鉄と鉄製武具を生産していたかもしれない。アフマド・サンジャルは、当時の先端技術で武装した西遼軍に無謀な戦いを仕かけ惨敗したわけだが、大きな問題がその先にある。

鉄は、武具だけでなく、農具で使うこともできる。たとえば、南宋で鉄製の農具が普及し、農作物の生産量が著しく増大している。北宋も南宋も、海路でヨーロッパやイスラーム圏に多量の鉄や鉄具を輸出できた。にもかかわらず、主要な輸出品は絹織物や陶磁器等であった。

商人たちが、重い鉄や鉄具を大量輸送する手段＝大型帆船等を保有していなかったためであると考えられるが、もしも商人たちが鉄を容易に輸送できたとすれば、鉄は当時の世界商品になっていたかもしれない。

歴史家や社会学者、経済学者たちは、陸路や海路の交易を基準にして近代の起点を考察する場合がある。そして、経済が「富と財」から「富と財と商品」に移行した場面（商品経済が誕生した場面）を資本主義経済のはじまりである、と論じる場合がある。だが、人間の労働力を例外にして、ほとんどすべての商品が地球規模で流通する社会が資本主義社会である。経済が「富と財」から「富と財と商品」に移行した場面（おそらく12世紀後半から13世紀初頭）を近代の起点にすることができても、資本主義経済の起点にすることはできない。たとえ交易が活発であったとしても、重量物の輸送、とりわけ多量の鉄や鉄具の輸送が困難であった時代を資本主義経済の時代であったということはできない。

（たとえ重量物の輸送が可能であったとしても、人間労働が商品化＝労働力化していない時代を資本主義経済の時代であったということはできない。それについては後述するが、労働者と奴隷を区別しない社会学者や経済学者たちが、12世紀～13世紀を資本主義の起点にする場合がある）

アフマド・サンジャルの死後、ホラムズ・シャー朝が再興し、メソポタミア全土とイラン高原、およびホラーサーン地方を支配した。そして1200年、アラーウッディーンがスルターンに即位する。即位後、アラーウッディーンはゴール朝の侵入を阻止してカラハン朝を併合し、首都をサマルカンドに移す。そして1215年、ゴール朝を滅ぼしアフガニスタン西南部を支配する。

だが1219年、モンゴル軍が侵攻し、ホラムズ・シャー朝は崩壊した。1220年、アラーウッディーンはカスピ海のアバスクン島で死去する。アラーウッディーンの死後、彼の息子ジャラールッディーンが各地を転戦して「英雄物語」を残し、1231年に死去する。

コラム46：　中世イタリアと中世ギリシャの戦い

ビザンツ軍がルーム・セルジューク朝軍と対峙すれば、第2回十字軍は無傷のままエルサレムにたどり着けたかもしれない。だが、前節でルッジェーロ2世がシチリア王国を建国し、シチリア王に即位したと述べたが、そのルッジェーロ2世下のシチリア軍がビザンツ版図内に侵入し、ギリシャのコリントスやテーベを略奪していた。コリントスやテーベでシチリア軍と戦っていたビザンツ軍に、第2回十字軍を支援する余裕も引率する余裕もない。

しかもローマ教皇は、シチリア王国とビザンツ帝国の戦争を制止していない。当時のローマ教皇は無能で怠慢であった、ということもできる。外交上の支援がなかったことが、第2回十字軍の不幸につながった。

（そもそも、十字軍遠征が異常である。南レヴァントやエジプトのイスラーム教徒が、キリスト教徒の巡礼を妨害していたわけではない。彼らは、現地のキリスト教徒と共存してもいた。当時のイスラーム教徒には、とりわけ南レヴァントやエジプトのイスラーム教徒には、西ヨーロッパ諸国が十字軍を遠征する理由がさっぱりわからなかったと思う）

十字軍とイスラーム教徒の戦いより、シチリア軍とビザンツ軍の戦いのほうが、利害関係があきらかで、戦争の規模も大きい。シチリア王国とビザンツ帝国の戦い、すなわち「中世イタリア」と「中世ギリシャ」の戦いは領土争奪戦である。

ビザンツ版図内に侵入し、ギリシャのコリントスやテーベを略奪していたルッジェーロ2世下のシチリア軍をビザンツ軍が撃退したが、1154年にルッジェーロ2世が死去し、それを知ったビザンツ皇帝マヌエル1世がイタリア半島南部を奪還しようとする（ビザンツ軍は、ハンガリーにも侵入し、マヌエル1世がハンガリーを属国化している。マヌエル1世がハンガリーを属国化する経緯は後述する）。

シチリア軍がビザンツ軍を撃退した。そして1185年、ビザンツ版図内に再度侵入し、デュッラキウムとテッサロニキを占領する。ビザンツ帝国の皇統がコムネノス朝からアンゲロス朝に変遷し、ビザンツ軍がシチリア軍を撃退してデュッラキウムとテッサロニキを奪還した。

1081年のデュッラキウムの戦いからはじまり、100年以上続いた戦争で、シチリア王国とビザンツ帝国は互いに消耗した。1282年（あるいは1302年）、シチリア王国はナポリ王国とトリナクリア王国に分裂し、他方、ビザンツ帝国は1204年に崩壊した後、1452年に消滅する。

## コラム47： ミュリオケファロンの戦い

第1回十字軍の協力を得てニカイアを奪還し、他方、シチリア軍の侵攻を阻止したコムネノス朝ビザンツ帝国は、その後キリキア・アルメニア王国とアンティオキア公国を支配する。そして、メンデルス川流域の戦いでルーム・セルジューク軍を撃破し、版図をさらに広げた。

1176年、アナトリア地方の奪還を目指すビザンツ皇帝マヌエル1世が大軍を率いてルーム・セルジューク朝の首都イコニウムに進軍する。だが、ミュリオケファロンの戦いでクルチ・アルスラーン2世率いるルーム・セルジューク軍が撃退する。そして1185年、シチリア軍がビザンツ版図内に再度侵入し、デュッラキウムやテッサロニキを占領する。クーデターが勃発し、イサキオス・アンゲロス＝イサキオス2世が帝位を簒奪してビザンツ帝国の皇統がコムネノス朝からアンゲロス朝に変遷した。

イサキオス2世下のビザンツ軍がシチリア軍を撃退したが、同年、ペタールとアセンの兄弟が第二次ブルガリア帝国の開国を宣言する。イサキオス2世は親征してブルガリアを制圧したが、ペタールとアセンの兄弟はドナウ川以北に逃れ、ビザンツ軍が撤退した後再度蜂起する。1188年、ブルガリアは事実上独立した（他方、バルカン半島西部でステファン・ネマニャがネマニッチ朝セルビア王国を開国している）。

サラーフッディーンは、ビザンツ帝国の混乱やブルガリアの独立を見ながら「ジハード」を宣言したといえる。サラーフッディーンの死後、イサキオス2世の弟アレクシオス3世が兄を幽閉してビザンツ皇帝に即位する。このとき、ドイツに亡命したイサキオス2世の長男アレクシオス4世が後に災いの種になるが、ブルガリアを失ったビザンツ帝国は国力が大きく衰退した。

ちなみに、ビザンツ軍がミュリオケファロンの戦いで惨敗した後、フリードリヒ1世は使者を派遣して「ドイツ皇帝こそがローマの正帝であり、ギリシャを支配する存在でもある」と伝えている。ビザンツ帝国から事実上独立したブルガリアがドイツに同盟を申し出ていたこともあり、フリードリヒ1世下のドイツ軍が反転してコンスタンティノープルに進軍する可能性は大いにあった。ビザンツ帝国が、沐浴中のフリードリヒ1世を暗殺した可能性を否定できない。

## ４．５　西ヨーロッパの動向

　１１３５年にイングランド王ヘンリー１世が死去し、その後イングランドとノルマンディー地方が無政府状態に陥る。内乱が約２０年続き、１１５４年、ヘンリー２世がイングランド王に即位する。イングランドの王位がノルマン朝からプランタジネット朝に変遷した。
　ヘンリー２世は、父方のアンジュー、メーヌ、トゥーレーヌのフランス各地、および母方のノルマンディー地方とイングランド、アイルランドの一部を相続した。さらにフランス王ルイ７世と離婚したアリエノール（イギリス名エレノア）と結婚し、アキテーヌ地方を共同支配する。すなわち、ヘンリー２世はフランス国土の約半分を支配し、イングランドも支配した。

（ロワール川中流域を境にして、フランスを北フランスと南フランスに分けて見ることができる。そして、当時のカペー朝フランス王権は南フランスに浸透していない。したがって、当時のフランス王の支配地域は意外に狭い。ヘンリー２世の領地は概ね北フランス西部とイングランド、およびアイルランドの一部、アリエノールの領地は概ね南フランス西部＝アキテーヌ地方である）

　１１６０年、フランス王ルイ７世はヘンリー２世の求めに応じ、娘のマルグリットをヘンリー２世の次男若ヘンリーに嫁がせた。後のフランス王フィリップ２世はまだ誕生していない。すなわち、当時のルイ７世に嗣子がいなかった。したがって、若ヘンリーとマルグリットの結婚はやがて若ヘンリーがフランス王に即位することを意味していた。
　ヘンリー２世はルイ７世より１３歳若い。彼は、自身の存命中にプランタジネット朝フランス王国が実現すると考えていたように思う（すでに述べたが、当時のイングランド王国はフランス王国の属国で、イングランド王はフランス王の臣下である）。だが１１６５年、フィリップ２世が誕生し、ルイ７世は嗣子を得る。
　プランタジネット朝フランス王国の夢を失ったヘンリー２世はプランタジネット朝イングランド王国の開国（すなわちフランスからの独立）を目指す。１１６６年、ヘンリー２世は官僚機構を再構築して強化した。具体的には、イングランドの統治体制を契約関係から主従関係に変更し、司法制度を整備して無政府状態の再発を防止する。
　主従関係の下で、諸侯は恩貸地の保証を得るが、他方、イングランド王に従軍しない諸侯は領地や財貨を代納しなければならなくなる。司法制度の整備は、聖職者の裁判権を弱化する政策であった。この司法制度整備が陪審員制のはじまりになるが、カンタベリー大司教ベケットが反発する。そして、ヘンリー２世下の騎士たちがベケットを殺害するという「事件」が勃発した。ヘンリー２世は、ローマ教皇に謝罪して破門を逃れた。
　１１７１年、ヘンリー２世は大軍を率いてアイルランドに侵攻し、ダブリン王を封臣にして総督府を置く。そして、イングランド全域をローマ教皇に寄進して「プランタジネット朝ノルマンディー王国（アンジュー朝ノルマンディー王国）」の開国を目指す。だが、彼の家族はフランスからの独立など望んでいなかった。
　１１６９年に、モンミラーユでヘンリー２世とルイ７世が交わした約定により、次男若ヘンリーの北フランス西部相続が決まっていた。また、マルグリットと結婚した彼は義父ルイ７世に臣従していた。三男リチャードは、母のアリエノールから南フランス西部＝アキテーヌ地方を相続することが決まっていたし、それはアリエノールが望んでいたことでもあった。四男ジェフリーは、ブルターニュ公家に婿入りして豊潤なブルターニュ地方（ノルマンディー地方に隣接する北フランス西部）の領主になる道ができていた。彼らにとって、フランスからの独立は馬鹿げたことであり、フランス王との信頼関係を築くほうが重要である。
　１１７３年、三人の息子（次男若ヘンリーと三男リチャード、四男ジェフリー）と妃アリエノール、さらに彼らを支持する諸侯たちが反乱を起こす。ヘンリー２世は家族の反乱を鎮圧し、１１８９年に死去する。ちなみに、当時１歳の五男ジョンが相続する領地はなかったが、ヘンリー２世は１１７７年にローマ教皇からアイルランドの領主権＝ロードシップをジョンに与える許可を得ている。

（１１８０年にルイ７世が死去し、フィリップ２世がフランス王に即位している。そしてヘンリー２世が死去する前に次男若ヘンリーと四男ジェフリーが死去している。四男ジェフリーは１１８１年にブルターニュ公に即位したが、父ヘンリー２世に反抗したため、フィリップ２世の元に身を寄せていた。次男若ヘンリーは病死したが、ジェフリーの死因はフィリップ２世が開催した馬上槍試合に出場して得た負傷である）

　ヘンリー２世は「立法者」ではない。にもかかわらず、イングランドの統治体制を契約関係から主従関係に変更したことも、反乱の温床であったと思う。とりわけアキテーヌ地方の諸侯たちは、フランス王に臣従するつもりはなかったが、イングランド王に臣従するつもりもなかった。彼らにとって、国王は隣接するナバラ王国の名君サンチョ６世のほうが望ましかったとさえいえる。アリエノールは、彼らの心情を理解していた。

（ただし、ガスコーニュ地方の諸侯たちがアリエノールの宗主権を認めていたとは思えない。彼らはフランス王に臣従

していた。ちなみに、南フランス西部はロワール川中流域以南からガロンヌ川以北までがアキテーヌ地方で、ガロンヌ川以南がガスコーニュ地方である。南フランスの面積は概ね日本の九州と同じで、アキテーヌ地方を福岡県と佐賀県、長崎県に置き換え、ガスコーニュ地方を熊本県と鹿児島県、南フランス東部のトゥールーズ地方を大分県と宮崎県に置き換えると分かりやすい）

　ヘンリー2世の死後、アイルランドを除くすべての領地を三男リチャードが相続する。リチャードはイングランド王リチャード1世に即位した。そして、フランス王フィリップ2世とともに第3回十字軍遠征に参戦する。
　第3回十字軍遠征についてはすでに述べたが、リチャード1世はエルサレムに向かう途中、シチリア王国に立ち寄っている。そして、当時のシチリア王タンクレーディと争い、メッシーナを占領した。1189年にシチリア王グリエルモ2世が死去したことはすでに述べたが、グリエルモ2世の妃はリチャード1世の妹ジェーン（ジョーン）である。タンクレーディは、メッシーナ返還の見返りにジェーンと彼女の持参金2万マーク＝2万マルクを返す。さらにジェフリーの遺子アーサーをシチリア王の後継にすると文書で約束した。

（リチャード1世は金に困っていた。彼は遠征前にスコットランドの独立を認め、見返りにスコットランド王ウィリアム1世から1万マルクの軍資金を得ている。ジェーンの持参金2万マルクも必要な軍資金であった。とはいえ、アーサーをシチリア王の後継にしたのは余計であった）

　当時、リチャード1世はフィリップ2世の異母姉アデル（若ヘンリーの妻マルグリットの妹。英語名アリス）と婚約していた。だが、母親のアリエノールがナバラ王サンチョ6世の娘ベレンガリアを伴ってシチリアを訪れ、彼女との結婚を迫る。その頃、フィリップ2世もシチリアに立ち寄っている。リチャード1世はフィリップ2世に臣従を誓約し、見返りにアデルとの婚約を破棄する（コラム48）。
　歴史家や作家たちが、リチャード1世がアデルとの婚約を破棄したことが、フィリップ2世がアッコ陥落後に帰国した原因である、と論じる場合がある。だが、フィリップ2世は賢明な王である。リチャード1世とベレンガリアの結婚には外交上の意味があり、それがフランス全土の安全にも寄与すると理解していたはずである。フィリップ2世の帰国に情緒的な理由があったとすれば、おそらくジェーンである。
　当時、フィリップ2世は妃のイザベルを亡くしていた。フィリップ2世が、幼なじみのジェーンとの再婚を望んだ可能性がある。だが、おそらくジェーンが同意しなかった。あるいは、アリエノールが同意しなかった。アリエノールにとって、ジェーンの再婚相手はイベリア半島東部かアキテーヌ地方に隣接する南フランス東部の諸侯でなければならなかった。ジェーンは南フランス東部のトゥールーズ伯レーモン6世と再婚する（コラム49）。
　その後リチャード1世はキプロスを占領してエルサレム王国に売却し、ベレンガリアと結婚式を上げた後、南レヴァントに赴く。リチャード1世は、アッコ陥落後もサラーフッディーンと戦い続けるが、1192年に休戦協定を結び帰国する。だが、帰路の途中、ドイツ皇帝ハインリヒ6世に捕らえられた。

（1155年にフリードリヒ1世が即位するまでのドイツ帝国の経緯はすでに述べたが、イタリア北部の諸侯や民衆はドイツ帝国の「法」に従わない。フリードリヒ1世はイタリア遠征をくり返した。1158年の遠征で、イタリア北部の14都市を支配する場面があった。だが、多大な税を要求したため、14都市が離反する。そして1160年、ローマ教皇アレクサンデル3世がフリードリヒ1世を破門する。激怒したフリードリヒ1世はミラノを破壊したが、反乱は止まない。1168年、イタリア北部の諸都市がロンバルディア同盟を結成し、ローマ教皇アレクサンデル3世の宗主権を認める。フリードリヒ1世は、再度イタリア遠征を計画するが、盟友ザクセン公ハインリヒが同行を拒否し、他の諸侯たちも拒否する。それでもフリードリヒ1世は傭兵を雇って軍を編成し、イタリア北部に進軍するが、1176年のレニャーノの戦いで惨敗する。その後フリードリヒ1世はアレクサンデル3世と和解し、ドイツに帰国した後、ザクセン公ハインリヒを弾劾する。そして1181年、ザクセン地方に進軍する。ザクセン公ハインリヒはすべての領地を失い、イングランド王ヘンリー2世の元に身を寄せる（ザクセン公ハインリヒの妻はヘンリー2世の娘マチルダである）。ザクセン公ハインリヒを追放した後、フリードリヒ1世はボヘミア王国やハンガリー王国を支配下に置き、シチリア王国と婚姻関係を結ぶ。フリードリヒ1世の嫡男ハインリヒ6世とシチリア王ルッジェーロ2世の末娘コンスタンツァが結婚した。フリードリヒ1世は、その後第3回十字軍遠征に従軍して死去したことはすでに述べたが、それを知ったザクセン公ハインリヒが帰国してフリードリヒ1世の嫡男ハインリヒ6世を破る。だが、ザクセン公ハインリヒは自身の死期を予感していた。彼はハインリヒ6世と和解し、1195年に死去する。他方、1189年にシチリア王グリエルモ2世が死去し、彼の従弟タンクレーディが即位する。だが、正統な王位継承者はハインリヒ6世の妃コンスタンツァである。ハインリヒ6世は、シチリア王位を要求してナポリ遠征をくり返し、リチャード1世を捕縛した。実際にリチャード1世を捕縛したのはオーストリア公レオポルト5世であるが、彼はハインリヒ6世の手下にすぎない。レオポルト5世も第3回十字軍遠征に従軍している。アッコ陥落の際に、リチャード1世に手柄を横取りされたと怒ったようであるが、その程度の小者である）

　アリエノールがドイツに赴き、銀15万マルクの身代金を支払って解放したと伝えられているが、ハインリヒ6世がリチャード1世を捕縛した目的は身代金ではない。目的はシチリア王位である。彼に、リチャード1世がタンクレーディから獲得したアーサーのシチリア王位継承権を取り消す必要があった。

フランス王フィリップ2世は、リチャード1世を解放しないよう、ハインリヒ6世に要請した。他方、弟のジョンがイングランド王位を狙う。解放されたリチャード1世は、いったんイングランドに戻り、ジョンを説き伏せる。そして、ローマ教皇にヒューバート・ウォルターのカンタベリー大司教就任を要請し、彼にイングランドの統治を委ねる。その後大陸＝フランス本土に戻り、フィリップ2世と会戦する。

結局、ヘンリー2世が目指したように、リチャード1世もプランタジネット朝ノルマンディー王国の開国を目指す。ただし、ヘンリー2世とちがい、ローマ教皇庁はサラーフッディーンと戦ったリチャード1世に一目置いていた。また、義父のナバラ王サンチョ6世の支援を当てにすることもできた。しかも1197年にドイツ皇帝ハインリヒ6世が死去し、ローマ教皇インノケンティウス3世（在位1198～1216年）がシチリア王国を支配している。情勢はリチャード1世が圧倒的に有利で、フィリップ2世は苦戦を強いられた。だが1199年、リチャード1世は死去する（鎧を脱いだときに肩に刺さったクロスボウの矢が死因である、と伝えられている）。

リチャード1世は、ジョンの後継に悩んだようである。だが、ジョンを後継者に指名しないのであれば、アーサーを後継者に指名するしかない。しかし、ブルターニュ公アーサーはフィリップ2世に臣従している。リチャード1世は遺言で弟ジョンを指名し、アリエノールもジョンの即位を支持した。1999年、カンタベリー大司教ヒューバート・ウォルターがジョンに戴冠する。

1200年、イングランド王ジョンは離婚してアングレーム伯の娘イザベルと再婚する。離婚と再婚の目的は、ブルターニュ諸侯をアーサーから離反させることであった。だが、ブルターニュの諸侯たちは、アーサーがイングランド王に即位すべきであると考えていた。アンジュー、メーヌ、トゥーレーヌ各地の諸侯たちも同様であった（ノルマンディーやイングランドの諸侯たちも、アーサーの即位を望んでいたかもしれない）。しかも厄介なことに、イザベルはジョンと結婚する前にラ・マルシュ伯ユーグと婚約していた。

1202年、フランス王フィリップ2世はジョンを法廷に呼び出す。理由は結婚問題である。だが、ジョンは出廷しない。フィリップ2世はジョンの領地をすべて没収し、アーサーに与えると宣言した。結局、ジョンもプランタジネット朝ノルマンディー王国の開国を目指す。

ジョンはフランス本土に渡り、アーサーを幽閉する（その後のアーサーの行方は不明であるが、おそらくジョンが殺害した）。それでもブルターニュ地方とアンジュー、メーヌ、トゥーレーヌ各地の諸侯たち、すなわち北フランス西部の諸侯たちはジョンを支持しない。アキテーヌ地方の諸侯たちもジョンを支持しない。

アリエノールは、フォントヴロー修道院に隠遁し、1204年に死去する。そしてカンタベリー大司教ヒューバート・ウォルターが1205年に死去する。その後、後任のカンタベリー大司教をめぐる争いがあり、ローマ教皇インノケンティウス3世がジョンを破門する。破門されたジョンは、イングランドのカトリック教会領を没収して軍備を増強し、フランス領の奪還を目指す。

1208年、ドイツ皇帝ハインリヒ6世の後を継いだ彼の弟フィリップが暗殺された。そしてザクセン公ハインリヒの三男オットーがドイツ皇帝オットー4世に即位する。

（1197年にハインリヒ6世が死去したとき、彼の嫡男フリードリヒは3歳であった。コンスタンツァは、ハインリヒ6世の弟フィリップのドイツ皇帝継承を承認する。他方、ローマ教皇インノケンティウス3世を後見人にしてフリードリヒをシチリア王に即位させた。そして1198年に死去する。コンスタンツァは、成人した息子が穏やかに暮らすことを願っていたかもしれない。だが、後見人の質が悪すぎた。インノケンティウス3世は、公会議で「教皇が太陽、皇帝は月」と演説するほどの野心家である。ドイツ皇帝フィリップは、娘の結婚問題が原因で殺害されたといわれているが、主犯はインノケンティウス3世である。インノケンティウス3世は、フィリップが即位する場面でオットー4世の即位を支持していた。見返りは六つの特許状である。それら特許状は、ローマ教皇がイタリア全土の支配者になることを意味していた。だが即位後、オットー4世はインノケンティウス3世との誓約を破棄する。そしてローマ市に進軍し、1122年にドイツ皇帝ハインリヒ5世が結んだヴォルムス協約を取り消す。さらにドイツ皇帝に聖職者叙任権を付与することを迫る（ヴォルムス協約を取り消せば、六つの特許状は自動消滅する。また、ドイツ皇帝が聖職者叙任権を得れば、ローマ教皇がドイツ皇帝を推挙する場面がなくなる）。他方、シチリア王フリードリヒに臣従を要求し、イタリア南部に進軍した。インノケンティウス3世は、オットー4世を破門し、新ドイツ皇帝選出を呼びかける。1212年、シチリア王フリードリヒがドイツのニュルンベルグに赴き、新ドイツ皇帝フリードリヒ2世に即位する。フランス王フィリップ2世も彼を推挙した。オットー4世は急遽ドイツに引き返し、フランス王国への侵攻を企てる。ちなみに、インノケンティウス3世は1216年に死去するが、彼は後述する第4回十字軍遠征を呼びかけている。また、少年十字軍やアルビジョア十字軍、北方十字軍遠征も彼が教皇の代に行われた。イベリア半島のレコンキスタ運動にも深く関与したインノケンティウス3世は、殺戮を厭わないローマ教皇で、愚かな野心家であったというしかない）

ジョンとオットー4世は幼なじみで気心が知れている（ザクセン公ハインリヒと妻マチルダがヘンリー2世の元に身を寄せていた頃、幼いオットー4世も父母といっしょに身を寄せていた）。軍備を増強したジョンは、イングランド全土をローマ教皇インノケンティウス3世に寄進するという「大嘘」をつき、破門を解く。そしてオットー4世と同盟を結び、フランス王国に侵攻する。

ジョンとオットー4世の挟撃作戦は成功するかのように見えたが、1214年のブーヴィーヌの戦いでフランス軍に大敗する。ジョンはイングランドに戻り、オットー4世は蟄居する。その後ジョンはイングランドの諸侯たちに多数の特許状（この多数の特許状が有名な大憲章＝マグナ・カルタである）を与えることを強いられる。イングランドの統治体制が主従関係から契約関係に戻るが、ジョンは「大嘘」を根拠にローマ教皇の臣下としてイングランドの王権を再度強化しようとする。内戦＝第一次バロン戦争が勃発し、イングランド諸侯はフィリップ2世の長男ルイを迎え入れた。

1216年、イングランド王ジョンが死去する。他方、ルイもイングランドの統治に失敗する。ルイはイングランドの諸侯たちとランベス条約（1217年）を結びフランスに帰国した。そして、ジョンの嫡子ヘンリーがイングランド王ヘンリー3世に即位する。他方、1223年にフィリップ2世が死去し、ルイがフランス王ルイ8世に即位するが、約3年後に死去する。その後ルイ8世の嫡子ルイがフランス王ルイ9世に即位する。

8世紀後半～12世紀後半までが「広義の中世」の突破期である。したがって、本節はリチャード1世が死去した場面で終えるべきであった。しかし、文治主義下の西ヨーロッパ史をひとつの「中世物語」として読めるようにしたいと考え、13世紀前半頃までの西ヨーロッパ史に言及した。

西ヨーロッパの中世物語は、村落共同体＝農村と中世都市＝商工業都市、国体概念の誕生、ビザンツ帝国と十字軍都市国家の間で生じた商品空間（商品経済＝位相構造）の形成等と無縁ではない。そして筆者のレベル4パースペクティヴに従えば、その後「広義の近代」の出現期と「広義の中世」の成熟期がはじまる。

「広義の近代」の出現期と「広義の中世」の成熟期は重畳するが、西ヨーロッパやビザンツ帝国の動向を考察するだけでは仕分けができない。「広義の近代」の出現期と「広義の中世」の成熟期を仕分けるには、東ヨーロッパの動向も考察する必要がある。次節で「東ヨーロッパの動向」を論じるが、本節同様、13世紀前半頃までの東ヨーロッパ史に言及する。

コラム48： スコットランド王国

当時のスコットランドを手短に説明する。9世紀中頃に即位したケネス1世が最初のスコットランド王であるが、スコットランド全土を統一したのはウィリアム1世（在位1165～1214年）である。ウィリアム1世はスコットランドのカトリック教会をカンタベリー大司教から独立させ、ノーサンバーランド地方の支配をめぐってヘンリー2世と争う。

ヘンリー2世の死後、リチャード1世は1万マルクの軍資金を得てスコットランドの独立を認めた。ウィリアム1世はノーサンバーランド地方の売却も要求した。しかしリチャード1世は拒否する。リチャード1世の死後、ウィリアム1世はジョン王からノーサンバーランド地方を買い取ろうとする。ジョンは、売却するつもりでいたが、売却する前にウィリアム1世が死去する。

ウィリアム1世の死後、後を継いだアレグザンダー2世とアレグザンダー3世はイングランドとの争いを避けた。当時、スコットランド西岸のヘブリディーズ諸島とアイリッシュ海のマン島はデンマーク・ノルウェー領であった。デンマーク・ノルウェーとの領有権争いを抱えていたため、アレグザンダー2世もアレグザンダー3世もイングランドと争う余裕がなかった。彼らの代に、ヘブリディーズ諸島とマン島がスコットランド領になる。

## コラム49： 女傑アリエノールの夢

西ゴート人もアラブ人も、フランク人もピレネー山脈西部のバスク地方やガスコーニュ地方を支配できなかった。そして在住のバスク人が9世紀頃に建国した国家がナバラ王国である。

ナバラ王サンチョ6世は政治的にも軍事的にも優れた王であった。他方、アリエノールは、ナバラ王国と南フランス（アキテーヌとガスコーニュ、トゥールーズ地方）がひとつになった新たな王国の夢を見ていたように思う。彼女にとって、ロワール川中流以北（北フランス西部やイングランド等）は不要で、息子のリチャード1世は彼女の夢を実現する「道具」であったかもしれない。

むろん、リチャード1世も彼女と同じ夢を見ていたように思う。時代は貨幣経済の時代から商品経済の時代（あるいは文治主義の時代から法治主義の時代）に変遷しつつあったが、アリエノールにもリチャード1世にも、そしてサンチョ6世にも領土的野心はなかった。もしも「アリエノールの夢」が実現していれば、「英仏百年戦争」が勃発する場面はなかったかもしれない。

（当時のヨーロッパで領土的野心のもっとも強い人物は、ローマ教皇インノケンティウス3世である。本文で、ジョンの寄進を「大嘘」と書いたが、インノケンティウス3世の要求であったかもしれない。一部の歴史家が、ヘンリー2世はイングランドをローマ教皇に寄進するつもりでいた、と論じている。筆者は、彼らの言説に即して本文を書いたが、インノケンティウス3世の要求でないとすれば、ジョンの「大嘘」はヘンリー2世の模倣だったかもしれない。だが、ヘンリー2世とちがい、ジョンに北フランス西部を統治する術はなかった）

ちなみに、ナバラ王国は13世紀にフランスから王を迎え、フランスとの友好を維持しながら存続する。だが、16世紀にカスティーリャ女王イザベル1世と結婚して現在のスペインを建国したアラゴン王フェルナンド2世に併合された。ナバラ王国の歴史は古く、バスク地方（バスク自治州）には今も独立の気運があるが、筆者の見るところ、古代や先史時代（バスク人はネアンデルタール人の末梢であるとの説がある）の記憶より、フランスの王統が長く続いたことのほうが独立の気運を高めているように思う。もしも沖縄で中国の皇統が長く続いていたとすれば、日本もスペインと同様な場面に直面しているかもしれない。

余談であるが、ピーター・オトゥールがヘンリー2世を演じ、キャサリン・ヘプバーンがアリエノールを演じた映画「冬のライオン」は、名作であるが、フィクションである。

## ４．６　東ヨーロッパの動向

多くの聖職者と諸侯がドイツ皇后テオファヌを敬愛していた。オットー2世の死後、テオファヌがドイツ帝国の執政を担う。テオファヌは991年に死去するが、成人したオットー3世が母の意思を継ぐ。

（テオファヌはオットー3世を出産する前に娘を3人出産した。3人の娘はそれぞれ修道院に入り、長女アーデルハイトと次女ゾフィーはやがて修道院長になる。だが、三女マティルデは修道院を出てライン宮中伯エッツォと結婚した。マティルデは10人の子女を出産する。彼女の息子のひとりが大司教、5名の娘が修道院長になる）

当時、ザクセン朝ドイツ帝国とカペー朝フランス王国の関係は良好で、ボヘミア公国（現在のチェコ共和国）はドイツ帝国の優等生であった。したがって、ハンガリーおよびポーランドとの友好、あるいは同盟がオットー3世の外交課題になる。

西暦1000年、ドイツ皇帝オットー3世はハンガリーとポーランドの独立を認め、さらに同盟を結ぶ。そして大司教座の設置を認め、アールバード朝ハンガリー王イシュトヴァーン1世（在位997～1038年）とピャスト朝ポーランド王ボレスワフ1世（在位992～1025年）の戴冠も認める。すなわち、オットー3世はハンガリー王国とポーランド王国の「開国」を認めた。

オットー3世の承認を得たハンガリー王イシュトヴァーン1世はただちに戴冠し、王権を強化してスロヴァキア（概ね現在のスロヴァキア共和国）やトランシルヴァニア（概ね現在のルーマニア中西部）地方を占領する。だが、ポーランド王ボレスワフ1世はただちに戴冠しない。ボレスワフ1世は、死去する直前にようやく戴冠する。

すでに述べたが、ボレスワフ1世の父メシュコ1世はボヘミア公国の公女ドゥブラフカを娶っている。すなわち、ボレスワフ1世の母親はドゥブラフカで、ボレスワフ1世は、ボヘミア公国は自身の所領であると考えていた（あるいは、隣接するシレジア地方はポーランド領で、奪還しなければならないと考えていた）。

1002年、オットー3世が死去する。オットー3世の死後、ボレスワフ1世はドイツ帝国との同盟を破棄してボヘミア公国に侵攻する。プラハを占領したボレスワフ1世は、「ボヘミア公ボレスラフ4世」と称し、ボヘミア公国を全域支配する。当然、ドイツ帝国は反撃する。長い戦争が続き、1018年にようやく和議が成立した。その後ボヘミア公位がプシェミスル家に戻る。

（ボヘミア公国はヴァーツラフ1世（在位921～935年）の代にキリスト教国としての地位を確立し、ドイツ帝国の宗主権を受け入れた。とはいえ、内乱と骨肉の争いは絶えなかった。ボヘミア公位がプシェミスル家に戻った後も内乱と骨肉の争いがしばらく続く。また、シレジア（ドイツ名シュレージェン）地方の領有をめぐるポーランドとの争いも続いた）

1076年、ポーランド王ボレスワフ2世がローマ教皇グレゴリウス7世から戴冠を授与する。しかし1079年にクラクフ司教スタニスワフを殺害したため、ポーランド貴族たちは彼を国外に追放した（事件の原因は不明であるが、スタニスワフに「非」があったかもしれない。しかし、スタニスワフは人望が厚く、文治主義を重視するポーランド貴族たちはボレスワフ2世を国外追放した）。

ボレスワフ2世国外追放後、彼の弟ヴワディスワフ1世がポーランドの執政を担うが、ポーランド王に即位できない。他方、「カノッサの屈辱」に耐えたドイツ皇帝ハインリヒ4世がボヘミア公ヴラチスラフ2世にボヘミア王位を与える。ハインリヒ4世は、ポーランド王位もヴラチスラフ2世に与えた。ヴワディスワフ1世は、ヴラチスラフ2世に臣従し、彼の長女ユディタを娶る。

1092年、ボヘミア王兼ポーランド王ヴラチスラフ2世が死去する。彼の死後、四人の息子たちが王位を争う。ボヘミアとポーランドの王位が空位になり、ボヘミアは無政府状態に陥る。他方、ポーランドでヴワディスワフ1世の嫡男ボレスワフ3世（在位1102～1138年）が「大公」に即位する。

ポーランド大公ボレスワフ3世は、1109年のフントシュベルトの戦いでドイツ皇帝ハインリヒ4世率いるドイツ軍を破り、オーデル川（現在のドイツとポーランドの国境を流れる川。ポーランド名オドラ川）からヴィスワ川（ポーランドのクラクフとワルシャワ、グダニスクの中心を流れる大河）までの広大な土地を獲得する。

ハインリヒ4世と戦争を繰り返したボレスワフ3世がポーランド王に即位する場面はなかった。ハインリヒ4世の死後、ボレスワフ3世は新ドイツ皇帝ロタール3世と和睦し、ポーランドを5分割して5人の息子に与え死去する。その後ポーランドの分裂状態が長期化するが、他方、ボヘミアではオタカル1世（在位1192～1230年）が即位して無政府状態を解消する。そしてオタカル2世（オタカル1世の孫。在位1253～1278年）の代に転機が訪れる。

ハンガリーでは、1038年にイシュトヴァーン1世が死去する。イシュトヴァーン1世の死後、内紛が続き、異民族や異教徒との戦いも勃発した。しかしラースロー1世（在位1077～1095年）の代に統一を回復する。ラースロー1

世の死後、ハンガリー王に即位したカールマーン1世（在位1095～1116年）がクロアチアを占領し、ヴェネツィアからアドリア海沿岸のダルマツィア地方を奪取して版図を拡大する。

カールマーン1世は統一を維持しながら版図を拡大したが、大きな間違いをふたつした。ひとつは、弟のアールモシュと彼の息子を盲目にして修道院に監禁したことである。もうひとつは、先妻フェリチアの死後、キエフ大公ウラジーミル2世の娘エヴフィミヤと再婚したことである。

ハンガリーには、「王の息子より年上である王家の年長者が王位を継ぐ」という慣習がある。かつてアールモシュが反旗を翻した場面があったが、カールマーン1世が彼と彼の息子を盲目にして監禁したのは自身の長男に後を継がせるためである。また、カールマーン1世はエヴフィミヤと再婚したが、当時のカールマーン1世は高齢でしかも病身であった。そのためエヴフィミヤは不貞を働く。カールマーン1世は離縁してエヴフィミヤをキエフに送り返すが、その後彼女は男子をひとり出産する。カールマーン1世は認知しなかったが、後にこの男子＝ボリスがハンガリー王位を目指す。

名君カールマーン1世はエヴフィミヤと再婚した3年後に死去する。カールマーン1世の死後、彼の長男イシュトヴァーン2世が即位するが、嫡子がいなかった。イシュトヴァーン2世の死後、アールモシュの息子ベーラ2世（在位1131～1141年）が即位する。だが、エヴフィミヤが出産した男子＝ボリスがハンガリー王位の継承を主張し、ポーランド大公ボレスワフ3世の支援を得て侵攻を繰り返す。盲目のベーラ2世を彼の妃イロナが支え、彼女の兄ベロシュがハンガリー軍の総司令に就任して奮戦した。1135年、ボレスワフ3世がドイツ皇帝ロタール3世と和睦したため、後ろ盾を失ったボリスはハンガリー王位を諦める（ベーラ2世の姉たちが嫁いだオーストリア公やボヘミア公がロタール3世のドイツ皇帝即位を支持していた。当然、ロタール3世はベーラ2世を支持する。他方、ロタール3世と和睦したボレスワフ3世はボリスを支援できない）。

ボリスの王位簒奪を阻止したベーラ2世は、ボスニアを占領する。だが、ボスニアはビザンツ帝国の版図である。ベーラ2世の死後、彼の長男ゲーザ2世が即位するが、ボスニア奪還を目指すビザンツ皇帝マヌエル1世率いるビザンツ軍がハンガリーに侵攻する。ハンガリーはボスニアとダルマツィア地方を失い、ビザンツ帝国の属国になる。

ゲーザ2世の死後、彼の長男イシュトヴァーン3世が即位するが、ゲーザ2世の二人の弟が存命していた。上で述べたが、ハンガリーには男系年長者相続の慣習がある。マヌエル1世下のビザンツ軍が再度ハンガリーに侵攻し、ゲーザ2世の弟ラースロー2世が即位する。しかし彼は急死する（暗殺された可能性がある）。

ラースロー2世の死後、ゲーザ2世のもうひとりの弟が即位するが、ドイツ皇帝フリードリヒ1世の支援を得たイシュトヴァーン3世が王位を奪還する。しかしビザンツ皇帝マヌエル1世はハンガリーの属国化を諦めない。ハンガリーはボスニアとダルマツィア地方の他にクロアチアを失い、1172年にイシュトヴァーン3世が死去する。そして彼の弟ベーラ3世が即位する。

ゲーザ2世は、幼少期のベーラ3世をコンスタンティノープルに送っていた。いわゆる「人質」であったが、聡明な人物で、嫡子に恵まれなかったマヌエル1世は溺愛したらしい。ベーラ3世はマヌエル1世の庇護下で育つ。もしもアレクシオス2世が誕生しなければ、ベーラ3世はビザンツ皇帝に即位していたかもしれない。だが、アレクシオス2世が誕生したため、彼は帰国してハンガリー王に即位する（むろん、後押ししたのはマヌエル1世である）。

「ビザンツの知」の下で、ハンガリーが再生した。マヌエル1世の死後、ベーラ3世（在位1172～1196年）はクロアチアとボスニア、ダルマツィア地方とセルビアを奪還し、ハンガリーの版図を拡大する。ベーラ3世は、奪還したクロアチアとボスニア、ダルマツィア地方とセルビアをすべて王領化した。ハンガリーの版図の約7割が王領になる。ベーラ3世の死後、彼の長男イレム1世が即位するが、1204年に死去する。その後彼の弟アンドラーシュ2世（在位1205～1235年）が即位する。アンドラーシュ2世は、王領を貴族や教会に分配した。他方、鉱山を開発して財政を強化する（カルパティア山脈には、良質な金山や銀山が多数存在する）。アンドラーシュ2世の死後、彼の長男ベーラ4世（在位1235～1270年）が即位し、ハンガリーに転機が訪れる（コラム50）。

ところで、現在のドイツの首都はベルリンであるが、「広義の中世」の突破期（8世紀後半～12世紀後半）の頃のベルリンは湿地帯で、ヴェンド人が暮らしていた。彼らは独自の信仰を持ち、エルベ川以西のキリスト教徒やオーデル川下流域およびヴィスワ川上流域のキリスト教徒と対立していた。すなわち、当時のドイツ帝国はエルベ川までが版図であった。

ドイツ帝国はエルベ川からオーデル川、およびヴィスワ川中流域から下流域まで（ヴィエルコポルスカやポモージェ、西ポモージェ地方）の支配を目指す。とはいえ、ザクセン朝期やザーリアー朝期のドイツ帝国の行動は穏やかであった。しかし1144年にローマ教皇エウゲニウス3世が第2回十字軍遠征を呼びかけた場面で、ホーエンシュタウフェン朝はヴェンド人が住む地域の武力支配を提案した。ローマ教皇エウゲニウス3世が提案を認め、第2回十字軍遠征と並行して「ヴェンド十字軍」遠征がはじまる。

ドイツ皇帝フリードリヒ1世の盟友ザクセン公ハインリヒもヴェンド十字軍に従軍した。ハインリヒはリューベクを強奪し、オルデンブルクから司教座を移す。そしてリューベク司教ゲロルトが布教に努める。ゲロルトは、キリスト教に改宗して教会に10分の1税を納税すれば、ドイツ人が略奪する場面がなくなるとヴェンド人に呼びかけた。

ところで、ザクセン公ハインリヒがオルデンブルクからからリューベクに司教座を移した目的はヴェンド人の改宗であるが、にもかかわらず、彼はリューベクに特権を与え、カトリック教会の市政関与を禁じている。おそらく、リューベ

ク在住のドイツ移民（大多数が商人である）が特権を要求した。彼らは、リューベクをヴェネツィアと同様な共和的都市国家にすること、あるいは後述するノヴゴロドのような都市にすることを望んだように思う。ザクセン公ハインリヒはリューベクの共和制を容認した。その後彼を追放したドイツ皇帝フリードリヒ1世も特権を追認する。リューベクは、フリードリヒ2世の代に「帝国都市」になり、ハンザ同盟を形成する。

他方、デンマーク王ヴァルデマー1世下のデンマーク艦隊がヴェンド人の聖地リューゲン島（現在のドイツ最大の島。面積は佐渡島より少し大きい）を襲撃する。リューゲン島のヴェンド人は抵抗したが、やがてデンマーク軍に屈服する。その後ヴァルデマー1世の側近であったロスキレ司教アブサロンがリューゲン島での布教と統治に携わる。アブサロンはゲロルトを模倣した。すなわち、武力行使しながらヴェンド人を懐柔する。多くの血が流れる場面もあったが、エルベ川以東からオーデル川流域、およびヴィスワ川中流域のキリスト教化とドイツ帝国化が具現する。

ヴィスワ川以東のバルト海沿岸でもキリスト教化とドイツ帝国化の試みが続いていた。1199年、リヴォニア司教に就任したアルベルトがローマ教皇インノケンティウス3世に「北方十字軍」遠征を提案する。理由は、アルベルトが赴任する前の司教が在住のリーヴ人（フィン・ウゴル系部族）に殺害されたためである（ちなみに、当時のドイツ帝国は現在のラトビア共和国とエストニア共和国、その周辺を「リーフラント」と呼んでいたが、カトリック教会は「リヴォニア」と呼んでいた）。

とはいえ、リーヴ人から見れば、ドイツ帝国とキリスト教徒（あるいはカトリック教会）は侵略者である。だが、ローマ教皇インノケンティウス3世はイタリア全土を一時支配し、イングランドの教皇領化を試み、またコンスタンティノープルを破壊した第4回十字軍遠征を呼びかけ、アルビジョア十字軍遠征も呼びかけた野心家である。支配地の拡大を望むインノケンティウス3世は、アルベルトの提案を承諾する。

北方十字軍遠征後、アルベルトはダウガヴァ川河口付近のリガ（現在のラトビア共和国の首都）に要塞を建設してユクスキュルから司教座を移し、刀剣騎士修道会を編成して兵員を常設する。1206年、リーヴ人がリガ近郊のホルメを襲撃するが、刀剣騎士修道会と十字軍が進軍し、リーヴ人を撃退する。その後リーヴ人がキリスト教に改宗し、在住の他の部族（レット人やトライデン族、ヴェンデン族）もキリスト教に改宗した。

だが、彼らが改宗したのは東南のリトアニア人（バルト・フィン系部族）を恐れ、ドイツ帝国に頼ろうとしたからである。1207年、リトアニア人がダウガヴァ川中流域を襲撃する。刀剣騎士修道会と十字軍、キリスト教に改宗したリーヴ人や他の部族が反撃し、リトアニア人は撤退した。その後アルベルトはドイツに一時帰国し、ドイツ皇帝フィリップから辺境伯の地位を得る。すなわち、アルベルトはリヴォニアを支配する封建諸侯になる。そして北方のエストニアの支配を目指す。

1215年、アルベルト下の大軍がエストニアに侵攻する。アルベルトは多数のエストニア人（バルト・フィン系部族）を殺戮し、エストニア南部を支配した。その後アルベルトはエストニア北部の支配も目指す。しかし隣接するロシア諸侯やギリシャ正教会の反発は必定である。そこで、アルベルトはデンマーク王ヴァルデマー2世に海上からの侵攻を依頼する。

1219年、デンマーク艦隊がエストニア北部を襲撃し、現在のエストニア共和国の首都タリン（デンマーク名レーヴァル）を占領した。その後デンマーク艦隊はエストニア西部のサーレマー島（ドイツ名エーゼル島。面積は沖縄本島より少し大きい）を襲撃したが、在住のエーゼル族に反撃され苦戦する。アルベルトが援軍を送り、デンマーク軍は危機を脱した。

1229年、多数の異教徒（リーヴ人やエストニア人）を殺戮し、リヴォニアとエストニア全土を支配したアルベルトが死去する。アルベルトの死後、刀剣騎士修道会と十字軍増援軍がリトアニアに侵攻する。だが、当時のリトアニアはミンダウカスがリトアニア人を統合し、強固な体制を築いていた。刀剣騎士修道会と十字軍増援軍はザウレ（シャウレイ）の戦いでリトアニアに惨敗する。その後、刀剣騎士修道会はドイツ騎士修道会に併合され、ドイツ騎士修道会の分団＝リヴォニア騎士団になる。

12世紀後半までに、家畜や穀物が物品貨幣から「商品」になり、経済空間に商品経済が生成する。そして10世紀後半～12世紀後半の東欧三国（チェコとポーランド、ハンガリー）が野心を剝き出しにして領地争奪を繰り返し、ドイツ帝国とカトリック教会が「異教の地（概ね現在のバルト三国）」に侵攻して殺戮を繰り返した。

現在のロシアやウクライナでも変化が生じた。966年にキエフ大公スヴャトスラフ1世がハザール・カガン国を征服し、その後ブルガリア帝国を征服してビザンツ帝国に進軍したことはすでに述べたが、スヴャトスラフ1世が征服したハザール・カガン国にペチェネグ人が侵入した。ビザンツ軍に敗北したスヴャトスラフ1世は、ドニエプル川河口付近でまで後退し、ペチェネグ人に襲撃され死去する。

スヴャトスラフ1世の死後、彼の長男ヤロポルクが即位する。ヤロポルクは次男オーレクを殺害して地位を固めようとするが、三男ウラジーミルがノヴゴロド（イリメニ湖付近の都市。ヴォルホフ川がイリメニ湖とラドガ湖をつなぎ、ラドガ湖から流れるネヴァ川がサンクトペテルベルク市を通過してバルト海に注いでいる）で兵を集め、キエフに進軍してヤロポルクを倒す。キエフ大公に即位したウラジーミル＝ウラジーミル1世は、ノヴゴロドで集めた兵をビザンツ皇帝バシレイオス2世の元に送り、彼の即位を助けた。

（報酬を要求するノヴゴロド兵＝ヴァリャーグたちを厄介払いしたとの説もあるが、彼らはバシレイオス2世の即位に

大いに役立った。その後の彼らの消息は不明であるが、ビザンツ軍に配属されて活躍したように思う）

その後ウラジーミル1世はギリシャ正教に改宗し、次のキエフ大公ヤロスラフ1世がペチェネグ人を討伐してキエフ大公国の版図を最大化する。他方、ペチェネグ人に代わりキプチャク人（ポロヴェッツ人）がドニエストル川とドニエプル川下流からカスピ海に注ぐヴォルガ川までの草原を支配する。ヤロスラフ1世の死後、彼の弟や息子たちが交互に即位するが、キプチャク人との戦争がキエフ大公の責務になる。

1113年、フセヴォロド1世の長男ウラジーミル2世が即位する。ウラジーミル2世は「モノマフ法典」を作成してキエフ大公国の統治制度を確立し、キプチャク人との戦争を繰り返す。
ウラジーミル2世は、自身を「ウラジーミル2世モノマフ」と呼んだ。「モノマフ」は「モノマコスの孫」という意味である。ウラジーミル2世の父フセヴォロド1世はヤロスラフ1世の三男であったが、母親はビザンツ皇帝コンスタンティノス9世モノマコスの娘である。ウラジーミル2世はビザンツ帝国を模倣し、キエフ大公国にテマ制＝軍管区制を導入する。西ヨーロッパより約1世紀遅れたが、軍管区制を導入したロシア・ウクライナで村落共同体が誕生した。だがウラジーミル2世の死後、各軍管区が「公国」になる。すなわち、各軍管区が独立した（コラム51）。

（ヤロスラフ1世は、5人の息子たちに領土を分配して死去する。キエフ大公国は5つの公国の連合になったが、その後相続争いが生じ、13の公国の連合になる。ビザンツ帝国を模倣したウラジーミル2世は分裂したキエフ大公国を再統一したといえるが、彼の死後、再度分裂したともいえる）

1125年にウラジーミル2世が死去し、彼の長男ムスチスラフ1世がキエフ大公に即位する。そして弟たちを各軍管区＝各公国に配置した。とはいえ、公国は13ある。したがって、ウラジーミル2世の息子たちがすべての公国に移住したわけではない。キエフ大公ムスチスラフ1世がノヴゴロド公を兼ねた（ちなみに、ウラジーミル2世の六男ユーリー・ドルゴルーキーが統治したウラジーミル・スーズダリ公国が後のモスクワ大公国の礎を築く）。
当時、ノヴゴロドでは貴族＝ボヤーレたちが民会＝ヴェーチェを開き、ひとりの市長＝ポサードニクを選出していた。しかしムスチスラフ1世は多忙で、ノヴゴロドの民会や市長選出（すなわち共和制）が大きな問題になる場面はなかった。だが1132年にムスチスラフ1世が死去した後、前ノヴゴロド公フセヴォロドが復位し、共和制を否定する。
1136年、ノヴゴロドで革命が勃発し、ノヴゴロドの民衆はフセヴォロドを追放した。革命後、ノヴゴロド公が頻繁に入れ替わり、ノヴゴロド市長やノヴゴロド貴族たちと対立する場面もあったが、ノヴゴロドの共和制が後退する場面はない。

「広義の中世」の突破期後半（10世紀後半～12世紀後半）に、封建制とほぼ同時に共和制も誕生している。後述するが、ユーラシア大陸東部でも封建制と共和制が誕生している。
筆者のレベル4パースペクティヴにしたがえば、開墾が進展して商品経済が誕生した。それが「広義の近代」の出現期であるが、封建制と共和制が併存する世界、および村落共同体＝農村と商工都市＝中世都市が混在する社会を「広義の中世」の産物と見るか「広義の近代」の産物と見るかは歴史観を左右する問題である。
むろん、古代や中世、近代などという時代区分は無意味である、と考える人もいる。だが、時代区分がなければ、経済や文化、民衆の動向を軽視し、戦争や王朝の変遷、政権交代等を基準にして歴史を区分けすることになりかねかい（ちなみに、ここでいう共和制と古代ローマの共和制につながりはない。近代の民主制と古代ギリシャの民主制につながりがないのと同じである）。
歴史家や社会学者の多くが、封建制は中世の産物である、と論じている。なるほど、封建制は中世帝国で誕生した。だが、制度と社会はちがう。封建制を確立した高度中世帝国（コムネノス朝ビザンツ帝国や南宋）で群雄が割拠する場面はなかったが、他方、高度中世帝国の亜周辺で群雄が割拠し、農村と中世都市が混在する社会が誕生する。レベル3パースペクティヴを考案した公文氏も同様な考えをお持ちのようだが、中世帝国の封建制は「広義の中世」の産物で、亜周辺の社会＝封建社会を「広義の近代」の産物であると考えてよいと思う。すなわち、封建社会は共和的社会である。ロシアのノヴゴロドで共和制が誕生し、ドイツのリューベクが模倣する。

（本書の主旨にしたがえば、封建制や封建社会より物品貨幣の消滅と鉱工業の進展を「広義の中世」の出来事と見るか「広義の近代」の出来事と見るかが重要である。筆者の認識では、物品貨幣の消滅は「広義の中世」の出来事で、鉱工業の進展は「広義の近代」の出来事である。余談であるが、経済学者やエコノミストたちは、物品貨幣と物品貨幣の利息を論じることなく金利を論じる。そのため、彼らは資本主義経済の起点を12～13世紀に置いたり15～16世紀に置いたりする。しかしマルクスは、資本主義経済下では、貨幣の資本的使用価値に依存して金利が生じると考えた。筆者の認識では、貨幣に資本的使用価値が生じたのは18世紀前半で、産業資本が誕生したのは18世紀後半である。資本主義経済の起点は、18世紀にすべきである）

## コラム50： アールパード朝ハンガリー王国

すでに述べたが、10世紀後半～12世紀後半のヨーロッパ諸国の国王は立法権を有していない。裁判権も有していない。中世ヨーロッパの統治体制は文治体制で、裁判権は皇帝＝ドイツ皇帝と教皇＝ローマ教皇が有していた。たとえば、ボヘミア＝チェコはドイツ帝国に裁判を委ね、ポーランドではカトリック教会が裁判を担っている。ボレスワフ2世がクラクフ司教スタニスワフを殺害した原因は、ドイツ皇帝に忠誠を誓い、ドイツ帝国に裁判を委ねようとしたためであったかもしれない。

他方、ハンガリーはベーラ3世の代にビザンツ帝国から立法制度を輸入する。ベーラ3世は国法を制定し、法治主義下で裁判権を行使した（ベーラ3世はボスニアとセルビア、クロアチア、ダルマツィアを奪還したが、国法を重視し、カトリック教会を押しつけるようなことはしなかった。おかげでボスニアとセルビアにギリシャ正教会が残る）。

ベーラ3世は名君であったが、ハンガリー王は名君が多い。ラースロー1世とカールマーン1世は名君であったし、ベーラ3世後のアンドラーシュ2世やベーラ4世も名君であった。アンドラーシュ3世の死後、ハンガリー王家がアールバード家からアンジュー家に変遷するが、アンジュー朝期のハンガリー王も名君が多い。彼らは有能な国家経営者であったが、ハンガリー王が国法を制定して執行し、法治体制下で裁判権を行使したことのほうが個人の資質以上に大きいかもしれない。

中世ハンガリー史は、政治家や企業経営者が学ぶに値する「歴史」である。時間のある方にはハンガリー旅行をお薦めしたい。ハンガリーはチェコやポーランドと同様な親日国である。しかも、ハンガリー語はウラル・アルタイ系言語で、文法が日本語に似ている。たとえば、人名や住所を読んだり書いたりする順序が日本語と同じである。

## コラム51： キエフ大公国とハンガリー王国の類似性

キエフ大公国は、ウラジーミル2世の代にビザンツ帝国から立法制度と司法制度を輸入した。ハンガリー王国も、ベーラ3世の代にビザンツ帝国から立法制度と司法制度を輸入したが、キエフ大公国の「輸入」はそれより半世紀以上早い。ウラジーミル2世の立法措置と国法制定がノヴゴロドの共和制を可能にしたように思う（筆者には、後のジョチ・ウルス＝キプチャク・ハン国もビザンツ帝国の統治体制＝法治体制を模倣したように思える）。

「広義の中世」の突破期後半（10世紀後半～12世紀後半）に、ビザンツ帝国の影響下にあったキエフ大公国の大公とハンガリー王国の国王が国法の制定と執行、裁判を担う「立法者」になったのは歴史上の事件である。キエフ大公国とハンガリー王国で、キリスト教会が裁判を担う場面がなくなる。

ちなみに、ペチェネグ人はモンゴル系部族の鉄勒であったとの説があるが、確証がない。しかしキプチャク人（ポロヴェッツ人）がトルコ系遊牧民であったことはほぼ間違いない。

ウラジーミル2世は83回出陣し、キプチャク人と19回講和した。それでもキエフ大公国とキプチャク人の戦火が止むことはなかった。結局、キエフ大公国とキプチャク人の戦争は約150年続く。「イーゴリ遠征物語（岩波書店）」はそのような時代に書かれた物語であるが、キエフ大公国もキプチャク人も疲弊した。そしてモンゴル帝国がロシア・ウクライナを支配する。

# ４．７　北宋と遼＝契丹の興亡

「広義の中世」の突破期にユーラシア大陸東西の貨幣経済がひとつになる。すなわち、銀貨＝銀が世界通貨になる。その後中世帝国のスキームが瓦解する。12世紀後半から「広義の近代」の出現期がはじまるが、それに重畳して「広義の中世」の成熟期もはじまる。「広義の近代」の出現期と「広義の中世」の成熟期を論じる前に、ユーラシア大陸東部の「広義の中世」の突破期後半、すなわち北宋と遼＝契丹、南宋と金に言及する。

10世紀前半のユーラシア大陸中西部の基軸通貨は銀である。だが、ユーラシア大陸東部では、銀はあまり流通していない。五代十国時代に後晋（936～946年）を開国した石敬瑭は、援軍の見返りに燕雲十六州（現在の北京市、および河北省と山西省の一部）を遼＝契丹に譲渡し、毎年30万匹の絹を贈る約束も交わした。しかし銀を贈る約束を交わしていない。おそらく、遼＝契丹が銀を要求しなかった。

銀貨＝銀が世界通貨になったのは10世紀後半、あるいは11世紀初頭である。1004年、北宋と遼＝契丹が「澶淵の盟」を結ぶ。澶淵の盟締結後、北宋は毎年20万匹の絹と10万両の銀を遼＝契丹に贈る。当時、2匹の絹と1反の絹織物、1両の銀と1匹の絹が等価であった。したがって、北宋が銀の歳幣を止め、毎年30万匹の絹を贈っても遼＝契丹が得る歳幣の大きさは同じである。しかし、遼＝契丹は10万匹の絹の代わりに10万両の世界通貨＝銀を要求し、北宋は要求に応じた。

前章のコラム29で述べたように、後周の世宗が廃仏を断行した目的は銅と銅貨の獲得である。北宋期の中国も主要な財貨は銅貨である。したがって、11世紀初頭までに銀が世界通貨になっていなければ、遼＝契丹が10万両の銀を北宋に要求する場面はない。

銀が世界通貨になる場面で大きな役割を担ったのは西ウイグル王国＝天山ウイグル王国である。すでに述べたが、唐朝末期にウイグル部族が西遷してタリム盆地およびジュンガル盆地で西ウイグル王国を建国した。歴史家たちは、西ウイグル王国は遊牧民が定住した画期的な例である、と論じている。しかし、遊牧民が農耕民になったわけではない。西ウイグル王国は史上初の製造業国である（少し遅れて同時代の大理国も製造業国になる）。

西ウイグル王国の主要農産物は綿花である（穀物も栽培していたかもしれないが、自給率は低かった。西ウイグル王国は北宋から小麦や米を輸入していた）。西ウイグル王国は、インドから種を仕入れて綿花を栽培し、綿織物を製造してユーラシア大陸東西に輸出した。当時、中央アジアの主要財貨は銀である。西ウイグル王国から綿織物を輸入する国々は銀で代価を支払った。他方、西ウイグル王国は北宋から小麦や米を輸入し、銀で代価を支払った。

綿織物は軽くて丈夫である。しかも毛織物や絹織物とちがい、洗濯ができる。そして、製造拠点がタリム盆地やジュンガル盆地であれば、陸路でユーラシア大陸東西に運べる。西ウイグル王国が製造する多量の綿織物が銀を世界通貨にした。

史上初の製造業国＝西ウイグル王国の建国は9世紀中頃である。西ウイグル王国は綿織物生産の他に冶金＝製鉄も営んだ。

（元衆院議員の栗本慎一郎氏が、著書で「シルクロードが東西交易ではたした役割はさほど大きくない、草原の道のほうが大きな役割をはたした」と論じている。栗本氏の認識が正しいとしても、栗本氏は西ウイグル王国が製造業国であったこと、そしてシルクロードが「製造業ベルト地帯」であったことを見落としている）

959年、後周の世宗が死去し、その翌年、趙匡胤＝太祖が北宋を開国する。そして次の太宗の代に河北の燕雲十六州を除く華北と華中、華南をほぼ統一した。その後北宋は遼＝契丹と敵対する。だが1004年に澶淵の盟を結び、安寧を得る。

北宋も、過去の中世帝国同様、政体を軍政と民政を分割したが、藩鎮の跋扈を憂慮して軍政も民政も中央集権化する。そのため官僚機構が肥大した。

「大きな政府」の北宋は、計画経済を推進する。とりわけ1070年に主席宰相に就任した法治主義者王安石と新法派が行った改革は「計画経済」と呼ぶにふさわしい。新法派は様々な政策を立案して施行したが、ここでは均輸法と農田水利法、青苗法に着目したい。

均輸法は、国家が版図内の物流を支配し、塩や茶の国家独占販売＝専売を定めた法である。均輸法施行後、北宋は水運と海運、造船業を支配し、塩や茶、酒等を専売化した。物流支配の意義は大きい。専売品目だけでなくその年の収穫量に応じて小麦や米を各地に配分する仕事も官僚の大きな仕事になる（唐も塩等を専売化したが、物流を支配する場面はなかった）。

農田水利法は国家の灌漑事業を定めた法であるが、たんに治水を促進する法ではない。従来、治水は既存田畑の水利を改善して農産物の収穫量を増大あるいは安定化する土木工事であった。しかし農田水利法が定める灌漑

事業は新運河の建設や新田の開墾を伴う。すなわち、農田水利法は「農業土木事業促進法」である。農田水利法の下で江南の開墾が進み、また都市周辺の田畑が広がる（したがって、都市から城壁がなくなる。北宋の帝都＝開封に城壁はない。長安や洛陽のような城壁に囲まれた古都は衰退する）。

青苗法は国家が麦籾や米籾を貸出し、その利息を定めた法である。利息の返済は物納である。当初、利息は年2割であった（ユーラシア大陸東部＝中国では、11世紀末～12世紀初頭頃まで、物品貨幣が残る。中国で物品貨幣が消滅するのは北宋末期か南宋初期である）。

農田水利法の下で開墾した新田は公有地である。青苗法は、開墾した公有地に農民が定着して農耕を行う上で必要な政策であった。だが、青苗法の下で小作農民が荘園から新田＝公有地に移動すれば、荘園は働き手を失い荒地になる。当然、隋唐時代から荘園を営む貴族たちは青苗法に反対する。青苗法は新法派と旧法派の争点になる（コラム52）。

1074年、河北で旱魃が勃発し、旧法派は「新法に対する天の怒りである」と上奏した。王安石は失脚する。だが青苗法は残る。しかし新法を推進した神宗が1085年に死去し、旧法派の重鎮であった文治主義者司馬光が復権して青苗法を廃止する（ちなみに、司馬光は新法をすべて廃止したわけではない。神宗が死去した翌年、王安石も死去する。そして青苗法を廃止した後、司馬光も死去する。司馬光の復帰は新法派を嫌った宣仁太皇太后の意志であったが、司馬光は青苗法以外の新法を廃止していない）。

朝廷が農田水利法の下で開墾した公有地を売却すれば、新法派と旧法派（法治主義者と文治主義者）の対立は生じなかったかもしれない。だが、土地は売買可能な財産であるが、「商品」ではない。農税を土地税＝地租等に変更し、国家の下で順序構造＝貨幣経済を維持する仕組みをつくらなければ公有地売却は容易にやれない。だが、新法派も旧法派も経済空間の構造をパラダイムシフトするところまで考えが及んでいなかった。したがって青苗法を廃止しても、新法派と旧法派の対立は解消しない。神宗が死去し、王安石と司馬光が死去した後も新法派と旧法派の不毛な争いが続く（ちなみに、農税が土地税＝地租等に移行するのは「広義の近代」の突破期である）。

北宋は軍政も民政も中央集権化し、「大きな政府」の下で制度設計を繰り返しながら計画経済を推進した。したがって、神宗が新法派を擁護するのは当然である、ともいえる。しかも北宋は1004年に遼＝契丹と澶淵の盟を結んだ後、1044年に西夏と慶暦の和約を結び、毎年15．2万匹の絹と7．2万両の銀、3万斤の茶（1斤は約500グラムである）を西夏に贈っていた。そして深刻な財政難に陥っていた。

西夏の歴史は唐が現在の寧夏回族自治区でタングート系部族の族長に李姓を下賜したときからはじまる。黄巣の乱の鎮圧に尽力したため、唐は族長に定難軍節度使＝夏国公の地位も与えた。しかし北宋が藩鎮を否定したため、夏国公であった李元昊は開国を決意する。李元昊は吐蕃の残存勢力＝青唐王国を攻め、さらに現在の甘粛省に侵攻して北宋の一部を支配する。そして1038年、西夏を開国する。

北宋にとって、慶暦の和約は軍事費の増大を抑制する上で不可欠な和約であった。北宋の国力からすれば、毎年西夏に贈る歳幣はさほど大きくない。しかし、西夏との抗争が、北宋を「大きな政府」だけでなく、「大きな軍」の帝国にしてしまう。

慶暦の和約後、北宋軍の兵員数が開国当初の3～4倍に増大する。武官数も増大した。官僚＝武官が支配する軍は弱いが、縮小は容易でない。神宗が即位した頃の北宋は財政難に陥っていた。神宗の死後、新たに即位した哲宗も新法派を擁護し、次の徽宗も新法派を擁護する。

そして1126年、「靖康の変」が勃発し、その翌年、北宋が滅ぶ。他方、西夏は現在の内モンゴル自治区のオルドス地方（黄河中流域の屈曲部）と甘粛省や青海省の一部を含む広大な領土を獲得した。

（北宋と西夏の抗争が長引いたのは、西夏が領内で産出する塩を国境付近で密売したためである。塩を専売していた北宋は、慶暦の和約後も多数の兵員を西夏との国境に配置して密売を阻止しなければならなかった。王安石が下野した後、神宗が無謀な西夏遠征を試みたが、塩の密売をなくすには西夏を併合するしかない、と判断したためであるように思う）

ところで、軍政と民政を中央集権化した点で北宋は画期的な中世帝国であったが、別の理由で遼＝契丹も画期的な中世帝国であった。

遼＝契丹の国教は仏教である。すでに述べたように、仏教は魏普南北朝時代から中国の国教であったが、儒教や道教と併存していた。北宋でも儒・道・仏の三教が変貌しつつ併存したが、遼＝契丹は国教を仏教に一元する。過去に、隋が国教を仏教＝天台宗に一元したが、遼＝契丹は陀羅尼に一元した。ちなみに、「陀羅尼（ダーラニー）」は仏教の呪文の総称である（信仰と無縁な筆者に仏教の解説などできないが、呪文がどのようなものかは分かる。呪文は、意味など分からなくても丸暗記して発声すればよいというような、文字の並びである。あるいは「歌」である。意味や文字を知らなくても、歌は歌える）。

とはいえ、遼＝契丹は当時の文明国であり、先進国である。したがって、陀羅尼が天台宗等の教義と無縁な「呪文」宗であるとすれば（あるいは「歌謡」であるとすれば）、遼＝契丹は仏教を教学の対象から外し、寺院を統治機構

から外した、というしかない。すなわち、遼＝契丹は国教会を統治機構から外した。

「広義の中世」の突破期後半（10世紀後半～12世紀後半）に、国教会の支えが不要になるくらいに、あるいは国教会では管理できないくらいに貨幣経済が発達した。したがって、遼＝契丹は耶律阿保機が907年に建国した当初から国教会に統治上の役割を期待しなかったように思う。そして国家が金融を支配し、計画経済を推進する（北宋が新法の下で行った改革は、平たく言えば遼＝契丹の模倣である。新法派と対立した旧法派に、遼＝契丹の模倣を嫌う「中華思想」があったのかもしれない）。

遼＝契丹は仏教の教義を「呪文」に一元し、儒教を排除した。だが、シャーマンが呪文を唱えて「帝国」を統治できる時代ではない。仏教を非国教化し、儒教を排除しても版図内を統治する法や制度が存在したはずである。

むろん共同体の慣習のようなものは存在した。したがって、遼＝契丹は雑多な部族の連合国家であったと論じる歴史家や社会学者もいるが、遼＝契丹は大軍を遠征して版図を拡大している。また、独自の文字＝契丹文字をつくり、さらに道路を整備して駅伝制を設けたりしている。そして植民を行い、西ウイグル王国を模倣して冶金＝製鉄も営んだ。そのような「帝国」が、たんに雑多な部族の連合国家であるはずがない。

遼＝契丹の統治は二面的であったといわれている。すなわち、版図を大きくいくつかに分割し、農耕民が居住する地区＝南面と遊牧民が居住する地区＝北面を異なる法や制度で支配した。問題は、何がそのような「帝国」を可能したのか、である。おそらく、「身分」がそのような「帝国」を可能にした。遼＝契丹は身分の差異で部族の差異を解消した（ちなみに、北魏や唐の統治も二面的であるが、官位の差異で部族の差異を解消している。筆者は、北魏や唐の統治が身分制に依拠していたとは考えない）。

魏晋南北朝時代に、前秦の皇帝苻堅（在位357～385年）が官位差をテコにして部族差を解消する政策を実施した。同時代の東西ローマ帝国やサーサーン朝ペルシャも同様である。中世帝国は官位差で部族差を解消する帝国であったといえる。そして、国教と国教会が帝国を支えた。

だが、「広義の中世」の突破期になって、中世帝国は分割統治に移行する。ビザンツ帝国はテマ制を導入し、唐は藩鎮制を導入する。テマ制や藩鎮制は分割統治を可能にするが、官位は残る。しかし官位は身分ではない。身分は職業であり、身分制が職業を家業化する。おそらく、遼＝契丹は史上初の「封建帝国」である（コラム53）。

コラム52：　中世奴隷制の終焉

前章で述べたように、10世紀後半あるいは11世紀初頭、ユーラシア大陸西部の「奴隷にするか奴隷にされるか」の時代が終わる。同時代のユーラシア大陸東部、すなわち中国でも奴隷制の時代が終わる。ユーラシア大陸西部の場合、イスラーム帝国が大規模な土木工事を止めたことに起因するが、ユーラシア大陸東部＝中国の場合、北宋が大規模な土木工事をはじめたことに起因する。

北宋期の中国で、賤民と呼ばれていた人々（律令制下の唐では奴卑と呼んでいた）が新田に移り、自作農になる。しかし荘園で小作を続ける場合も多かったようである。北宋期の中国では、農民の約8割が小作農であり、自作農でもあった。

ところで、筆者が知る限り、現代世界で農民が小作と自作を「兼作」している国家がふたつある。ロシアと日本である。ミハイル・ゴルバチョフが行ったペレストロイカの下で、ロシアの農民がコルホーズで小作に従事しながら居留地で自作もはじめた。「兼作」の下で、ロシアの穀物生産量が増大し、農産物の品種も豊富になる（この一点だけを見れば、ゴルバチョフは有能な政治家であったといえる）。

東西冷戦期のロシアは世界最大の穀物輸入国であった。ロシアの穀物ターミナル＝穀物庫の大半が今も黒海沿岸にあるのはそのためであるが、現在のロシアは穀物を輸出している。現在のロシアにとって、クリミア半島は穀物輸出をする要所である。

現在の日本でも、農民が「兼作」をはじめている。ただし、ロシアとちがい、減反政策が行き詰まり農地の荒廃を阻止するためにそうなった、というしかない。「兼作」は民主党政権下ではじまったが、政権が自民党に移っても続いている。むしろ自民党政権のほうが積極的で、第二次安倍内閣は減反政策を廃止して「農地バンク」を設立した。

筆者は、農民が小作と自作を「兼作」する農業のあり方を賞賛したい。米や小麦のような主要作物は小作をしながら共同生産し、野菜や果実のような商品作物は自作をしながら自由に生産するほうがよい。それが、農民に最低限の所得を保証し、同時に農民の所得増を可能にする（ロシアとちがい、日本の場合、農民は公有地や共有地より私有地で小作を行う場面が多いので、あまり賞賛できない。しかも最近の日本政府は、現代版荘園＝農業法人の設立を推進している）。

だが、現在のアメリカや中国の農業は、ロシアや日本の農業と形態がまるで異なる。アメリカの農業は自作中心である。所得が不安定なため、アメリカで離農が加速している。東西冷戦期に150%以上あったアメリカの食料自給率が、110～120%程度に低下している。アメリカの市場原理主義者たちは、農産物の輸出入自由化が、アメリカが「農業大国」に復帰すると道である、と思っているかもしれない。しかし放置した農地は数年で荒地になる。離農した農民が荒廃した農地を再生するのは容易でない。市場原理主義者たちが思うほど、農業は甘くない。

他方、中国の農業は小作中心である。所得が低いため、中国でも離農が加速している。現在の中国の食料自給率は100%弱であるといわれているが、なぜか中国は世界最大の穀物輸入国である。中国の食料自給率が大幅に低下し、食糧危機が勃発する場面があるかもしれない。

余談であるが、日本の農家一戸あたりの耕地面積は約1．5ヘクタールで、中国の自作農家一戸あたりの耕地面積は約0．5ヘクタールである。したがって、中国の自作農家は貧しく、自営が成り立たない、といったことをいう経済学者やエコノミスト、農政学者等がいる。しかし、彼らは認識が不足しているように思う。

中国では、自作農家は穀物を栽培しない。自作農家はもっぱら野菜を栽培している。農業経験のある読者は容易に理解できると思うが、一戸の農家が営める野菜畑は0．5ヘクタールが限度である。とてもではないが、一戸の農家に1．5ヘクタールの野菜畑は営めない。

中国で米や小麦を栽培しているのは農業法人である。しかし農業法人に勤務しながら自前の野菜畑や果樹園を営むのは容易でない。筆者は、「兼作」は共有地を活用する協同組合方式でなければ容易にやれない、と考える。

## コラム53： 遼と契丹のちがい

古くから、大興安嶺山脈以東（概ね遼河上流域）で契丹や室韋、奚といった部族が遊牧を営んでいた。しかし突厥やウイグル、高句麗のように目立つ存在ではなかった。唐は高宗の代に高句麗を滅ぼし、遼河流域を支配するが、目的は銅や銅山の確保だけであったように思う。現実に、唐と遼河東岸（現在のロシア沿海州やアムール州、ハバロフスク地区）を支配していた渤海との関係は良好であった。また、唐は新羅と和睦した。そして突厥やウイグルの支配を嫌う契丹や室韋、奚は唐の遼河西岸支配を望んでいた（杉山正明氏の著書「疾駆する草原の征服者（講談社）」によれば、郭子儀の部下であった李光弼は契丹の族長の長男である。郭子儀も李光弼も安史の乱を鎮圧した名将として名を残す）。

だが、戦乱の時代＝五代十国時代が遼＝契丹の建国を促す。907年（あるいは916年）に即位した耶律阿保機が各部族を束ねて華北とモンゴル高原に侵攻し、その後東方に侵攻して渤海を滅ぼす。耶律阿保機の死後、彼の次男耶律徳光が燕雲十六州を獲得し、開封を一時占領する。そして国号を定め、「遼」を号した。その後第5代皇帝に即位した聖宗（在位982～1031年）が国号を「契丹」に改めた。しかし第8代皇帝に即位した道宗（在位1055～1101年）が「遼」に戻す。

歴史家たちは、遼＝契丹の国号変更は恣意的なものであるかのように論じている。だが、遼＝契丹が史上初の封建帝国であるとすれば、国号の変更は「中身」が伴っている。耶律阿保機や耶律徳光は、隋唐帝国のような帝国の建設を目指していたかもしれない。すなわち、官位差で部族差を解消する帝国である。したがって、契丹だけでなく、室韋や奚といった部族も遼軍の一翼を担った。しかし聖宗＝耶律文殊奴は身分差＝職業差で部族差を解消する帝国を目指したように思う。おそらくそれが、多数の漢人が居住する燕雲十六州を平和裏に支配する方法であった（同様に、当時のモンゴル高原や沿海州等を平和裏に支配する方法でもあった）。

とはいえ聖宗は平和主義者ではない。聖宗は高麗と戦火を五度交えている。渤海の残存勢力が鴨緑江流域に定安国＝後渤海を建国したため、最初の戦火が勃発した。その後遼＝契丹と高麗の関係は修復するが、高麗で政変が勃発し、新高麗王が北宋に朝貢した。そのため二度目以降の戦火が勃発する。五度目の戦火で遼＝契丹軍が惨敗し、激怒した聖宗が大軍を編成して高麗遠征を準備する。だが、高麗が遼＝契丹に朝貢したため、講和が成立した。その後鴨緑江が国境になり、遼＝契丹と高麗の関係が修復する。聖宗は平和主義者ではなかったが、好戦的な人物でもなかった。高麗との戦争は皇帝の責務であったように思う。

（五代十国時代の影響があったか否かは不明であるが、朝鮮半島は892年から新羅と後百済、後高句麗が鼎立する後三国時代に突入する。しかし918年、王建が後高句麗王を追放して高麗を開国した。そして935年に新羅を併合し、936年に後百済を滅ぼして朝鮮半島を統一する。926年、遼＝契丹が渤海を滅ぼしたが、同年、耶律阿保機が死去して耶律徳光が後を継ぐ。耶律徳光は燕雲十六州の獲得を優先し、朝鮮半島に関心を示さなかった。王建は河北の干渉と内戦の激化を避けながら朝鮮半島を統一する。遼＝契丹と高麗の関係が悪化するのは北宋二代皇帝太宗（在位976～997年）が即位してからである）

ところで、聖宗が即位したのは12歳で、国号を「遼」から「契丹」に変更したのは即位した翌年である。おそらく、封建帝国を「発明」したのは垂簾聴政を行っていた承天皇太后（蕭燕燕）である。明代に書かれた「楊家将演義」では、承天皇太后は北宋最大の敵＝悪役として登場するが、彼女は北魏の馮太后に匹敵する聡明な女傑であった（北魏は、孝文帝の代に均田制や三長制を実施するが、孝文帝が即位したのは4歳である。したがって、均田制や三長制を実施したのは垂簾聴政を行っていた馮太后である）。

北方謙三氏の著作「楊家将（PHP文庫）」で、承天皇太后は「蕭太后」の名で登場する。北方氏は大英帝国の女王のようなイメージで「蕭太后」を表現しているが、現実にそうであったと思う。遼＝契丹の兵たちは、承天皇太后＝蕭太后に忠誠を誓い、彼女が遼軍を指揮した。

むろん彼女の偉大さは封建帝国を発明したことにある。身分は階級ではない。職業である。すなわち、身分制は職業を家業化して固定する制度＝掟である。したがって、軍人の家系に生まれなければ、軍人になれない。かなり窮屈な社会であるが、それが軍の巨大化を抑止して平和に寄与した。

承天皇太后＝蕭太后が封建帝国を「発明」し、聖宗が具現しなければ、澶淵の盟を結んだ後の遼＝契丹が北宋に再度侵攻する場面があったかもしれない。聖宗の死後、遼＝契丹は興宗の代に最盛期を迎える。1066年、興宗の後を継いだ道宗が国号を「遼」に戻した。道宗は異常なまでに仏教を好み、寺院を優遇した。それが、遼＝契丹の滅亡につながる。

（道宗は、家臣の讒言を信じ、優秀な皇太子を死に追いやった。それを悔やみ、仏教に救いを求めたが、政争の多い封建帝国の皇帝から華麗な中華帝国皇帝に変身しようとしていたようにも見える。本文で少し捕捉したが、陀羅尼信仰の下で読経が歌唱化していた可能性がある。私見であるが、遼＝契丹では、美声の持ち主でなければ僧侶や尼僧になれなかった。道宗は、オペラのような「大合唱」が好きな皇帝だったのかもしれない。今の日本にも、読経を歌唱する僧侶や尼僧がいる）

# ４．８　南宋と金の興亡

北宋で新法派と旧法派の対立が生じたように、遼＝契丹で南面派と北面派の対立が生じた。南面派は官僚機構と統治機構の刷新および律令体制の構築を目指し、北面派は身分制の維持を目指す。サーサーン朝ペルシャにとって、古代アケメネス朝ペルシャが理想の帝国であったように、道宗の代の遼＝契丹にとって隋唐が理想の帝国であったのかもしれない。1066年、道宗が国号を契丹から遼に戻したが、この国号変更は南面派の勝利を意味する。

道宗は1101年まで在位し、その間、遼の統治機構が寺院になり、寺院が権益集団化した。他方、身分制が崩壊し、土地の兼併が進展する。道宗の死後、天祚帝が即位したが、彼に寺院を排除して新たな国法を制定し、身分制あるいは「封建制」を再構築する意志も能力もなかった。

1114年、女真族の阿骨打（アクダ）が挙兵して反乱を起こし、1115年に現在の黒竜江省ハルビン付近で金の開国を宣言する。天祚帝は大軍を率いて阿骨打を攻めたが敗北する。天祚帝の敗北を知った北宋は、金と同盟して遼を挟撃し、燕雲十六州を奪還しようとする。1120年、北宋は金と海上の盟を結び、遼を挟撃する準備を整えた。

だが同年、江南の地で方臘の乱が勃発する。北宋は方臘の乱の鎮圧に中央軍＝禁軍を投じ、金との挟撃作戦に出遅れる。結局、金軍が単独で燕雲十六州を奪取する。1122年、遼軍は入来山で金軍に再度敗北し、天祚帝は現在の吉林省長春市付近に逃れ、その後西夏に亡命する。阿骨打は1123年に病死するが、1125年に金軍が天祚帝を捕縛し、遼が滅ぶ。

阿骨打は海上の盟を尊重し、奪取した燕雲十六州のうち6州を北宋に割譲した。だが、北宋の徽宗が遼の残存勢力と結託し、燕雲十六州の残り10州を奪取しようとする。阿骨打の死後、金の皇帝に即位した太宗＝呉乞買（ウキマイ）が激怒し、北宋に侵攻する。1126年、金軍は開封を陥落する。そして徽宗と彼の長男欽宗を捕縛し、現在の黒竜江省ハルビン付近に幽閉する（これが、前節で述べた「靖康の変」である）。

他方、華北への侵攻が金の西方支配を鈍らせた。金の西方支配は西夏と接するオルドス地方で止まる。金は北宋領の一部（現在の甘粛省等）を割譲して西夏を服属したが、遼が支配していたモンゴル高原が空白地帯化した。金に敗北した遼の残存勢力がモンゴル高原の同族たちと合流し、イリ川流域に移住した。そして耶律大石が「西遼」を建国する（その後の耶律大石と西遼の動向はすでに述べた）。

金が徽宗と欽宗を捕縛した後、趙構が即位して北宋の再興を目指す（趙構は徽宗の九男である）。主戦派の宗沢が義勇軍を編成し、開封や洛陽、その他華北各地で金軍と戦う。義勇軍が金軍と戦ったおかげで、高宗＝趙構が臨安（現在の杭州市）に逃れ、南宋を開国した。

筆者は、岳飛の活躍や秦檜の「悪事」を語るつもりはない。重視すべきことは、義勇軍および南宋軍と金軍の戦いが1141年の紹興の和議まで続いたことである。すなわち、阿骨打が遼に反旗を翻してから30年弱、華北で戦乱が続いた。約30年の戦乱で、綿密な計画経済下にあった華北（とりわけ淮河以北）が荒廃し、生産力を喪失する。

1161年、大軍を率いて南下した海陵王が陣中で死去し、世宗が金の皇帝に即位する。世宗は名君であったといわれているが、在位中（1161～1189年）に各地で反乱が多発している。また、世宗は北宋の計画経済を継承していない。金朝期の淮北（中原の地）で多くの農民が流民化した。淮河以北から南宋に逃れた農民も多数いた。テムジン＝チンギス・カン率いるモンゴル軍が金に侵攻した頃の淮河以北＝淮北は荒廃していた。

（金史では、海陵王は中華思想に染まった暗君とされている。だが、彼は淮北の再生を真面目に考えていたように思う。海陵王は、尚書省を皇帝直属下に置き、交子に類する「紙幣」を発行して計画経済を実施した。また、燕京に遷都し、さらに開封に遷都する。海陵王は、南宋に侵攻したが、淮北での屯田も目的であったように思う。海陵王が陣中で殺害されたのは、おそらく兵たちが屯田を嫌ったためである。女真族至上主義者の世宗が海陵王を暗君に仕立てた。世宗は倹約を重視して和平を推進し、約28年在位したが、淮北の再生に取り組む場面はなかった）

遼＝契丹と金はまるでちがう。遼＝契丹にとって、モンゴル高原の支配は必須であった。燕雲十六州を獲得したため、身分制を発明しなければならなかったが、遼＝契丹の本質は匈奴や柔然、突厥やウイグルと同様な遊牧民国家である。しかし金は華北で軍を全面展開したため、モンゴル高原を支配できなかった。したがって遊牧民国家にもなり得ない。

作家の故陳舜臣氏は、著書「中国の歴史（講談社文庫）」で、遼＝契丹と金のちがいは「草原の民」と「森の民」のちがいである、と論じている。他の作家や歴史家たちも同様に論じている。彼らは、契丹人の生誕地が遼河流域で、女真族の生誕地がアムール川流域であることを重視する。だが、遼河下流とアムール川下流は遠く離れているが、上流域は地理的に近い。遼＝契丹と金のちがいを民族差や地域差に置き換えないほうがよい。遼＝契丹も華北で軍を全面展開すれば、金と同様になっていたかもしれない。

ところで、北宋は1117年に大理国（概ね現在の雲南省）を冊封体制下に置いた。そして1120年、方臘の乱が勃発する。方臘の乱の鎮圧に中央軍＝禁軍を投じた北宋は、金との挟撃作戦に出遅れるが、筆者が重視したいのは大理国の属国化と方臘の乱のつながりである。大理国の属国化は北宋の負担を一時大きくする。しかし北宋は金と同盟を結び、遼を挟撃する戦略を立てながら、そのような重大時期に負担を一時大きくしている。

考えられる理由がひとつある。財政難である。北宋は「交子」を発行した。元来、交子は商人が発行する約束手形であったが、北宋期に政府手形になる。そして、交子＝政府手形の発行増が新法派の「理財」政策になる。北宋は、王安石が主席宰相に就任した神宗の代に交子の発行額を倍増する。神宗没後に即位した哲宗も徽宗も新法派を擁護し、交子の発行額をますます増大した。徽宗の代の交子発行額は、神宗の代の約20倍に増大していた。そして交子の価値と信用が暴落する。

手形は、償還期限が来れば現金化できるメタ貨幣である。手形に金利は生じないが、デフレ下では、蓄財手段としても有効である。北宋の朝廷が発行する交子＝政府手形の償還期限は概ね3年であったようだが、償還できない場合、新たな交子を発行してつなぐしかない。だが、「発行」の連鎖は永遠に続かない。徽宗は値引き＝銭引きして交子を償還した。当然、交子の価値と信用が暴落する（歴史家や経済学者の一部が、交子を「紙幣」などと論じているが、間違っている。交子は手形である。手形はメタ貨幣であって、貨幣ではない）。

大理国は銀の産地である。したがって、北宋が大理国を属国化した目的は銀を獲得して交子＝政府手形の信用を回復し、遼を挟撃する戦費を捻出するためであったと思う。だが、大理国を属国化しても、ただちに多量の銀を入手できるわけではない。歴史家たちは、疑問を感じつつも、方臘の乱の原因は徽宗が江南で産出する花石綱（珍花・名木・奇石等）を蒐集したためである、と論じている。中国の史書にそのような記述が多いのかもしれないが、風流天子徽宗の蒐集が大反乱の原因になったとは考えにくい。筆者は、方臘の乱の原因は交子の暴落であったと考える。ちなみに、方臘は漆園の経営者であった（陶工であったとの説もある）。

むろん銀が世界通貨になっていたことが大きいが、交子＝政府手形の発行から察するに、北宋もユーラシア大陸西部＝ビザンツ帝国と同様に、統治機構としての国教会を必要としなくなっていたように思う。

北宋期に中国仏教の主要宗派が天台宗等から禅宗と浄土信仰に移行した。官僚が禅宗と儒教を好み、民衆が浄土信仰に帰依する。浄土信仰は死者を火葬する信仰である。他方、儒教は「孝」を説いている。親の死体の焼却は「孝」に反するが、とはいえ朝廷の官僚＝儒教徒が新法派と旧法派に分裂して対立している状況下では、浄土信仰の弾圧などできない。

結局、北宋朝廷は民衆に「礼」を語りながら浄土信仰を抑止する。それが、南宋期の儒・道・仏の三教融合と道学あるいは宋学の誕生につながるが、遼＝契丹とは異なるプロセスで北宋も封建帝国化したといえる。

ところで、岳飛を処刑した秦檜は新法派であった。高宗の代の南宋は、宰相に就任した秦檜が実権を握り、華中と華南で改革を推進する。秦檜の死後、海陵王の南下が頓挫して金の脅威がなくなり、新法批判がはじまる。「北宋が滅亡した原因は新法である」、というわけである。

とはいえ北宋期の旧法派がひとつの理念の下で団結していたわけではない。旧法派とは、たんに新法に反対する人々＝文治主義者の総称にすぎない。しかし南宋での新法批判は、新たな統治制度のはじまりになる。すなわち、封建制が統治制度になる。

南宋で士大夫層が誕生し、識字率が高まった。そして朱熹（1130～1200年）が道学＝宋学を集大成し、朱子学を発明する。しかし朱子学の不思議＝三教融合より、封建制下で農業が発達したことに着目したい。

淮北から逃れてきた農民も多数いたため、南宋の人口約6000万のうち5000万以上が農民人口であった。そして、南宋でも農民の大多数が小作と自作を「兼作」する。北宋の場合、農民は荘園で小作をしたが、南宋の場合、農民は概ね共有地で小作をした。すなわち、南宋期の中国でも荘園が消滅し、村落共同体すなわち農村が誕生する。村落共同体＝農村の誕生が封建制を可能にした。

農業の技術革新も進展した。鉄製農具が普及し、肥料の使用もはじまる。農産物の生産量が増大し、農産物が商品化した。また、絹や陶磁器も量産され、商品化した（隋唐時代にあった絵柄や模様がなくなり、陶磁器は造形美を追求したシンプルなものになる。現代も同様であるが、装飾のないシンプルな商品ほど万人受けする。ちなみに、高麗は造形美に装飾を融合した高度な陶磁器を発明している）。

そして海運が盛んになる。すなわち、南宋期の中国で商品経済が誕生した。南宋期の中国は「東洋のルネサンス」期であったといえる（同時代のコムネノス朝ビザンツ帝国が南宋とよく似ている。ユーラシア大陸東西で封建制と商品経済がほぼ同時に誕生し、「広義の近代」の出現期がはじまる）。

南宋は「会子」を発行した。北宋が発行した交子を「紙幣」と論じる歴史家たちは、南宋が発行した会子も交子と同様であったと論じている。だが、交子は政府手形であるが、会子は政府債券である。すなわち、南宋は政府資産を担保にして会子を発行した。したがって当初、南宋は会子の発行限度額を1000万貫（1貫は銅貨1000枚である）と定めていた。

会子もメタ貨幣であるが、交子と異なり、信用度が高い。しかも南宋は会子と塩や茶のような専売品の交換を認め

た。したがって、交子は発行額が約20倍になった場面で暴落したが、専売品＝実物商品の裏付けを得た会子はその程度の発行額では暴落しない。南宋は会子の発行限度額を1000万貫から逐次増大し、末期の発行限度額が6億5000万貫になる。すなわち、発行限度額が国民ひとりあたり1貫以上になる。それでも会子が暴落する場面はなかった（商品経済の下で、会子が金融商品化したともいえる。あるいは、物品貨幣が消滅し、会子が事実上の紙幣として機能した）。

1273年、モンゴル軍が南宋防衛の要であった襄陽を陥落し、1276年、南宋の首都臨安を陥落する。そして1279年、最後の皇帝祥興帝が崖山の戦いで入水し、高度な中世文明を築いた南宋が滅ぶ。臨安の陥落は1204年のコンスタンティノープル陥落に似ているが、しかし十字軍とちがい、モンゴル軍は略奪を行っていない（コラム54）。

コラム54：「正気の歌」

南宋の「物語」は、岳飛ではじまり、文天祥で終わる。そして岳飛が国民的英雄になり、文天祥が忠臣義士の鏡になる。日本でも、文天祥は忠臣義士の鏡になる。古来、多くの日本人が文天祥を敬愛し、彼が獄中で書いた「正気の歌」を愛読した（作家の故陳舜臣氏が著書「中国の歴史（講談社文庫）」で「正気の歌」を詳しく解説しておられる）。

文天祥は、「正気の歌」の中で、宇宙が「気」で満ちていると語る。「気」には種類があり、最上の「気」が「正気」である。人間も他の生物も物質も、「気」が具現した存在である。過去に、「正気」が具現した人間存在が多数いた。文天祥は彼らの名を上げ、自身も「正気」が具現した人間存在であると語る。

文天祥が、「正気の歌」で南宋を賛美する場面はない。元朝を卑下する場面もない。忠臣義士のあるべき姿を語る場面もない。文天祥はたんに自分を語る。そして、自分に正直に生きると語る。すなわち、「正気」が具現した人間存在であるが故に、元朝の家臣になれない、と語る。

筆者には、文天祥は実存主義者であったとしかいいようがない。だが、歴史家たちは、文天祥を認識する前に文天祥を解釈しようとする。そのためつまらない解釈が多い。歴史家たちは、クビライが文天祥を長く獄中に留め帰順を迫ったのは、中華思想に染まった皇太子チンキムが彼の才能を惜しんだためである、と論じる。あるいは、南宋残存勢力の反乱を防ぐためであったと論じる。だが、クビライとチンキムは、文天祥の思想を必要としていたように思う。

筆者は、朱子学に疎いが、文天祥を除けば、朱子学の学徒で「気」に種類があると語った人物はいない。そして、多くの日本人が「正気の歌」を愛読したのは、そこに朱子学の真髄を見たからである。

日本はアニミズムの国である。日本では、様々な生物や物質に精霊が宿る。男女が性交しても、母体に精霊が宿らなければ子供は生まれない。しかし、「気」が人間や他の生物、物質をつくるのであれば、精霊は不要である。日本人にとって、「気」が具現したものが人間や他の生物、物質であるといった考えは、驚くべき異国の思想であった。

シャーマニズムを信仰していたモンゴル人にとっても同様であったように思う。とはいえ、その「気」に種類があるとすれば、朱子学や道学とシャーマニズムやアニミズムの調和が可能になるかもしれない。あるいは、キリスト教やイスラーム教、マニ教等との調和も可能になるかもしれない。クビライとチンキムは、そのような「超中華思想」を必要としていたように思う。ちなみに、当時のジョチ・ウルス＝キプチャク・ハン国はイスラーム教国で、フレグ・ウルス＝イル・ハン国はキリスト教国である。

ところで、幕末維新の志士にとって、「正気の歌」は座右の書であったが、幕末維新を題材にして作品を書く現代の作家たちが「正気の歌」を読んでいるとはとても思えない。もしも幕末維新の志士の多くが自身を「正気」が具現した人間存在であると信じて行動していたとすれば、そして現代の作家たちがそれを認識しているとすれば、彼らが描く幕末維新の人物像は今とはちがうものになる。幕末維新の志士たちは、倒幕どころか世界帝国の建設を目指していたかもしれないのである（日本史の専門家たちは、山縣有朋が推進した日韓併合を対ロシア政策であったと論じ、とりわけ加藤陽子氏は、山縣有朋が地政学を信奉していたと論じているが、幕末維新の志士たちが世界帝国の建設を目指していたとすれば、山縣有朋もそのひとりである）。

文天祥は忠臣義士であったが、「正気の歌」は忠臣義士の歌ではない。「正気」の考えの下で意外な行動や組み合わせが生じる場合がある。また、「正気」の考えが差別を助長する場面もある。筆者は、「正気」の考えが素晴らしい考えであるとは思わないが、しかし「正気の歌」は従来の道学を覆す思想を含んでいる。文天祥は、有能な文官であり武官であり、南宋の英雄であり偉大な思想家であった。

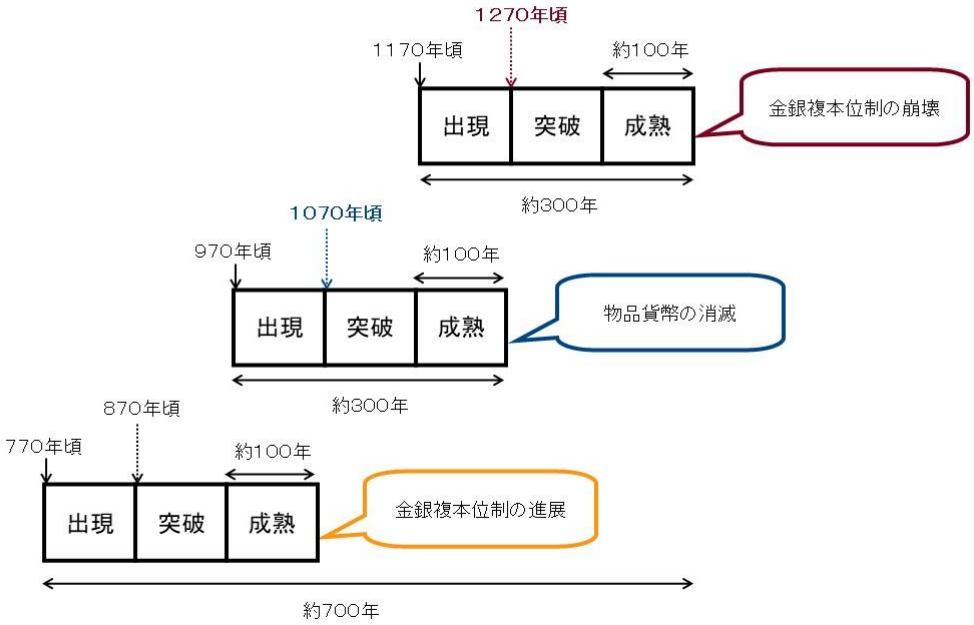
## ４．９「狭義の中世」

公文氏は、三つのパースペクティヴを提唱したが、公文氏の「広義の近代」は「狭義の近代」を内包している。同様に、筆者が提唱する「広義の中世」は「狭義の中世」を内包している。

8世紀後半～11世紀後半（770～1070年頃）に金銀複本位制が進展し、11世紀後半～13世紀後半（970～1270年頃）に物品貨幣が消滅する。そして12世紀後半から「広義の近代」が重畳し、他方、12世紀後半～15世紀後半（1170～1470年頃）に金銀複本位制が崩壊する。

金銀複本位制が進展した時代と物品貨幣が消滅した時代、さらに金銀複本位制が崩壊する時代を組み合わせて「狭義の中世」を論じることができる。下図（図9）は「狭義の中世」の抽象である。

図9「狭義の中世」




しかし、本書では「狭義の中世」も「広義の中世」の下で論じる。すなわち、上の三つの時代区分に言及しない。理由は構成上の都合である。

本書では、公文氏が提唱した「狭義の近代」も「広義の近代」の下で論じる。中世についても近代についても、本書は読者に十分満足していただける内容を含んでいると自負しているが、「狭義の中世」と「狭義の近代」を論じないことについては、了解していただくしかない。

（現代社会は資本主義社会である。そして、資本主義を論じ資本主義後の社会を予想することも本書の目的のひとつであるが、考察を進める上で市場経済と商品経済、貨幣経済を定義し、それら三つの数学的構造を非数学的構造＝資本主義経済から切り離す必要があった。筆者のレベル4パースペクティヴはそのためのもので、歴史をより詳細に語るためのものではない）